

その男、バーニング！

柳之助

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もつと……

もつと……

もつと熱くなれよ!!!!!!

闘魂爆熱！ 闘志伯仲！

バアアアアアアアアニング  
!!!!!!

※クリエイイト・ミッション『ビルドダイバースチャレンジ』／ビルド杯参加作品。

# 目次

飛び込め、世界	1
掴め、星光	27
奔れ、雷光	48
受け取れ、想い	67
見据えろ、現実	91
叫べ、魂	105
踊れよ、舞姫	120
高まれ、心	133



# 飛び込め、世界

——その光景に、胸の奥に何か焼き付いた。

ウインドウ一杯に天蓋とライト。逆光の中にあるのは、鋼の巨人。

エメラルドグリーンと白の包まれ、右肩に翼を模した巨大な剣、左手には身の丈もある鋭い槍。胸には宝玉のようなスフィアコア。鋭角的なボディはしかしどこか女性的なラインを描いている。腰から延びるエネルギー状のスカートがそのイメージを強調させているのだろうか。頭部の一对の耳がどこか猫を思わせるのがコミカルだ。

美しいと、素直に思った。

忘我を許さない状況だったのにも関わらず、思わず見惚れてしまった。

時間が止まったかのように。

何かが、奥底で揺らめいた。

「ガッ——！」

直後、白翠の槍が自分の鋼の体にぶち込まれる。

コックピットが揺れ、仮想空間故に痛みがないが純粹な衝撃が全身を襲い、

『 YOU LOSE ! 』

「弱く」

「っ……」

音声のみのウインドウから、対戦相手の声が届く。

凜とした銀嶺の声は、しかし絶対零度の切れ味。

「期待外れだわ——偽物さん」

その言葉に——胸の奥で何かが燃えている。

※※※

「というわけで、GBNだ！」

「はあ」

学校の放課後、幼馴染のタカシタ・コウタに連れられ、叫ばれカガリ・レンは思わず声を漏らした。

明るめの茶髪を揺らし、黒いフレームの眼鏡を輝かせたコウタが大きく手を広げ、その店の中を示す。つられて視線をずらせば、あたり一面にあるのは——ガンプラだ。

ガンダムプラモデル。

レンが生まれる前から放送しているロボットアニメのプラモデルであり、その箱が陳列棚にいくつも並んでいて、ショーウィンドウには完成済みのものが展示されている。

どれも、レンには見覚えがないものだった。

短く切りそろえ、整髪料で逆立った髪を思わず搔き、右眉にある小さな傷をなぞる。

「とうわけと言われても……その、なんだ。何をすればいい?」

「GBNだ!」

「んん……」

十数年来、高3の冬になるまで長い付き合いだったが、しかしここまでテンションが高いコウタは初めて見た。

背が180を超えていて、体つきも高校生離れしたがっしりとしたレンに対して、平均的な高校生らしいコウタなのが勢いのせいかわ彼の方が大きく見えてきた。

「やっとこの日が来た。苦節18年、幼馴染の堅物をついにGBNに引き込める……!」

「いや、俺とコウタがあつたのは小1の時だけだな」

「そんなことはどーだっていい! GBNだ!」

腹からの叫びがこの店、ガンダムベースに響き渡る。ほかの客の目線を集めるがすぐに逸らされる。コウタはこの常連らしいから慣れたものかもしれない。

コウタをいさめても無駄なことを悟り、思わず息を吐いた。

「……で、GBNとは」

「よくぞ聞いてくれた！」

ガンダムバトル・ネクサスオンライン。電腦空間で自分が作ったガンプラに乗って戦ったりして遊ぶゲーム、らしい。それ以外もコウタがノリノリで色々語ってくれたが今のレンに分かったのはそれくらいのことだった。コウタが中学からそれにはまっているのは知っているが、レンはやることがなかったのでプラモデルで遊ぶ、ということくらいしか知らないし、元々やる気もなかったのだ。

もちろんGBNは世界中に普及されており、今レンたちがいる川崎のガンダムベースのような店も大きな街であれば当然のようにあるから、存在自体は知っていた。だが、ただ知っているだけなのと実際にやるのはまた別の話である。

高校3年の冬、本来であれば受験シーズンまっさかりであるが、レンもコウタも推薦での大学進学が決まっており暇なのだ。

だからこそ、コウタに誘われてレンはGBNデビューを飾ることになったのだが。

「GBNにはガンプラがいるんだよな。俺、持っていないぜ」

「ああ、うん。僕の予備の機体を使ってもいいし、一から作ってもいいんだけどレンはガンプラ触ったことないよな。とりあえず今回は初めてだし」



「レンタル機体もやってるわよ！」

「そう、レンタル機体……って姉さん！ 人のセリフを！」

「あ、ども。ミナさん」

「はい、どうも。コウタ、レン君。ミナおねーさんですよ！」

亜麻色の髪のポニーテールにスポーツタイプのドライ素材のTシャツとスキニージーンズ。川崎ガンダムベースのロゴが入ったエプロンとシンプルな装いだが無何せんコウタの姉、タカシタ・ミナは美人だ。ここいらの学校で彼女以上の美女はそうはいないし、たまにだがモデルもやっている。横浜の大学でもミスコンを取ったという才媛だ。おまけに陸上で全国大会にも出ているのだから隙がない。レンにしても学校の勉強を何度も見てもらっている、姉に等しい存在でもある。

レンとコウタの二つ上の彼女は数年前からここでバイトをしていた。

「GBN初心者にはこのベースに置いてあるガンプラをレンタルで貸し出せるのよ。もちろんちよつとお金はかかるんだけどね。その分完成済みだから動作には問題ないわ。ただ、後々自分で作るのを推奨してるのはお忘れなく」

「なるほど……じゃあとりあえずはそれでいいか」

「んー、GBNは自分の機体作ってナンボだけ……一回目だし、いつか。姉さん、レンタル機体って何があったけ？」

「初心者貸し出し用はおすすめはザクかフリーダムかしら。……っっていつても、私はガンプラやGBN自体には詳しくないから何が人気かくらいしか分からないけど」

「店員なんだからいい加減ちよつとは基本性能くらい覚えようよ、姉さん。うーん、レンなら汎用性が高いやつがいいと思うんだけど……」

姉弟がレンを置いといて、レンタル用機体らしいショーウィンドウの前であれこれ語り合っている。

GBNの勝手が分からないし、こだわりもないレンは仕方ないので並んでいるガンプラを眺めていく。青や白のカラーリングが多いが中には赤や緑がメインのそれもある。ぱつと見、いかにもプラスチックの材質でコウタがよく読んでいたガンプラ雑誌のよく見れば細部に違いはあるが、正直レンには全て一緒に見えた。

「ん……これは？」

ショーウィンドウの中、一つ雰囲気が違うガンプラに目が止まった。

赤の色を基調したガンプラで、胸や肩、膝、腕にクリアパーツが輝いている。特徴的なのは腰回りに棒状のパーツが短いマントのように腰の横と後ろにかけて8本並んでいた。その棒マントだけではなく、なんとというか機体の色味が他の物とまったく違ったのだ。色に深みがあるというか、プラスチック感が無い。

「あー……それかあ」

「あらあら」

コウタが首をひねり、ミナが口に手を当てる。

「それも、貸し出し用なんだけどあんまり人気ないのよね。半年くらい前にここでやったガン普拉コンテストの優勝したものなんだけど、最初はすごい大人気だったけど今じゃまったく使われないわね。作った人が隣町の人だからたまーにメンテナンスはしてくれてるけど」

「へえ」

「まあそりゃあの人を作ったやつだし、それは初心者には……でもなあ……レンならなあ……」

なにやら唸っているコウタを横目にしつつ、改めてその機体を見る。

小さなカードにガン普拉の名前と製作者らしい名前が。見覚えも聞き覚えもない二つの名前を見やり、

「俺、これにするよ」

「あら、いいの、コウタ？」

「……………まあ、試す分にはいいんじゃない？」

「それじゃあこっちで貸し出し書類書いてねー」

「オッス」

「よし、なにはともあれガンプラは準備できたし——行こう、GBNへ！」

※※※

「おー……凄いな、これ」

GBNにログインし、ロビーへ出現したレンは思わず驚きの声を上げた。

初めてログインするのは半仮想空間とでもいうのか、漫画でよく見るフルダイブ型ではなくガンダムベースの筐体からバイザーとコントローラーステイックでプレイするタイプだがそれでもやたらリアルだ。自分の体を動かしているかのように錯覚してしまう。

ログインロビーは広く、見渡す限り多くのアバターがいて人のそれもある、獣人、少ないがどう見ても人間じゃないものもある。

中央にあるのは受付らしき場所といくつかの大きなモニターが。

「グレン！　ちゃんとログインできたね！」

呼ばれたのは背のログインポータルから。

初めて見る、だがなんとなく見覚えがある眼鏡の少年。藍色の髪とカーキ色のフライトジャケット姿だ。

「コウ……じゃなくて、サンタだっけ？」

「ああ！ こつちではリアルネームは無しだね」

タカシタコウタで、タが三つ。だからサンタ。

なんというか、安直だ。

「しっかし、そつちもグレンは安直じゃない？」

「いいだろ、別に。名前もじってるだけだし、あとアレも赤かったし」

GBN用のグレンのアバターはあまり現実と変わらない。高3にしては高い身長とガタイの良さ。髪型も変わらず、色だけ赤くしているだけ。緩めのボトムズに、ハイネックでノースリーブの体に張り付くアンダーウェアタイプのタンクトップ。

右眉の傷跡も、リアルと変わらずそのままだ。

「どつちもどつちか」

コウタ——肩をすくめる。

「それで？ 何から始めればいいんだ」

「んー、そうだなあ」

「そこの二人、もしかやGBN初参加かね!？」

「むっ?」

聞こえて来た声に振り向き、その男を見る。

長身茶髪の男性アバター。特徴的なシルバーのサングラスに、赤いネクタイ。スタイリッシュなスーツ姿の男が、二人へと歩み寄ってきた。

「め、メイジン・カワグチ!?!」

「いかにも!」

「誰?」

「メイジン・カワグチだ!」

だから誰だ。

「何、ただのビルダーさ。君たちのような初心者をサポートするためにロビーにたむろしているだけのね」

不敵な笑みを浮かべ、グレンとサンタに視線を送る。

「……………ふむ?」

何やら小さく首をかしげたが、その意味はグレンには分からなかった。

「サンタ、この人のこと知ってるのか?」

「三代目メイジン・カワグチだよ。ファイターズシリーズの人気キャラ」

「ああ?」

「あつと……」

「ファイターズとはアニメ『ガンダムビルドファイターズ』、および『ガンダムビルドファイターズトライ』において二作に渡りレギュラーであったキャラクターだ。ファイターズ主人公のイオリ・セイ、レイジのパイロットであり、トライでは主人公セカイを始め多くのファイターたちを見守っていたガンプラのメイジンだよ」

「はあ」

本人から説明は分かりやすかったが、よく分からなかった。

「えつと……アンタはアニメキャラで」

「うむ」

「……NPC?」

「否! 私はリアルに生きる人間である!」

「えつと……」

つまり、

「アニメキャラになりきってる人……?」

「ああこら! グレン!」

首をかき上げてつぶやいた途端に、サンタに首を引っ張られ、メイジンとやらの背を向けさせられる。

「ダメだろう、ガチロールの人にそういうこと突っ込んだら！ 無粋だ無粋！」

「ガチロ……？ あのさ、サンタ。専門用語を並べられても分からんのだけど」

「フハハハハハ！ なあに、気にするなサンタ君！ そしてグレン君！ 君はこう思っていることだろう！」

「はい？」

高笑いに振り替えると、メイジンは腕を広げ、

「いい歳してアニメキャラになりきっているイタイ男に話しかけられて本当に大丈夫なのかと！」

「いや、そこまでは言っていないんだけど……」

「だが！ ここはGBN！ GBNは自由！ 己の愛を否定されない世界！」

故にと、メイジンはさらに腕を振る。

「私は三代目メイジン・カワグチだ！ 誰がなんと言おうと三代目メイジン・カワグチなんだ……！」

「お、おう」

あまりの熱量にグレンは頷くしかなかった。

そもそもメイジンとやらを詳しく知らないグレンからすれば、そのあたりはコメントしづらい。



「それで、俺たちに何か用か？」

「こほん。先に言ったように私は初心者ダイバーの手助けをしていてね、君たちがそういう会話をしていたから話しかけたのだが……ふむ」

一度頷き、

「どうやらサンタ君は初心者というわけではないようだ。グレン君をサンタ君が誘つて、というわけかね。どうやら私はお邪魔だったかな」

「そうです！ その通りですメイジン！ そしてそんなことないですよ！ 僕があれこれ言うより、メイジンに見てもらったほうがいいですし！ そうだよな、グレン！」

「まー俺は別にいいけど」

「よかろう！ それではこのメイジン、全力でサポートを務めさせてもらおう！」

※※※

「へえ……これがコックピットか」

グレンは黒緑の球体空間を見渡し息を吐く。

格納庫エリアから、初めて搭乗したガンダムの中は思いのほかシンプルだ。目の前のコンソールと操縦桿用スティックが二つだけ。ガンダムとの戦闘においてこのコックピットから機体を操縦し、戦闘時の衝撃もここで表現されるらしい。

『どうだね、グレン君。操縦桿を握った気持ちは』

右横に小さなウィンドウが開き、メイジンの顔が映る。

ロビーからグレンの初操縦をナビゲートしてくれるとのこと。右も左も分からない身としてはありがたい。

「んー、ま、とりあえず動かしてみないとなんとも」

『確かに』

『テンション低いな、グレン。まだ火は付かないか？』

メイジンの横に、サンタの顔も映り問いかける。

「そりゃあまだ何もしてないからな。ここから、なんだろう？」

息を吐きつつ、操縦桿を握る。

メインウィンドウから見えるのはグレンが載るガンダムの外、射出路だ。

ガンダムのことをグレンは知らない。

だが、出撃の流儀だけは知っている。

「グレン——ソウルバーニングガンダム、出る！」

頭部アイラインに瞳を模した赤い光が輝き、各部クリアパーツが済んだ空色で光を灯す。

背部バックパックが起動し、光の粒が放出することで推進力が発生。コックピットに疑似再現された軽度の重力がグレンの体に掛かり——カタパルトから飛び出した。

「——おお」

飛び出した先、広がるのは無機質だが巨大なコロシウムだ。何も無い地面とドーム状の天蓋は黒く、目立ったものは何もない。

『改めて説明をしよう、グレン君』

「ああ」

『そこはフリーバトル用のコロシウムだ。ダイバーランクに関係なくランダムマッチングでバトルができる場所だね。システム的にトップランカーが参加すればニューピーとマッチングが起きることもあり得るが、まあそれはあまりないね。ランクでマッチング制限を賭けることも可能だ。おおむね下位から中位ランカーがメインとなる。上位ランカーは上位ランカーでバトルを行う場も用意されている』

メイジンの説明を聞きながら操縦桿を操作し、グレンはソウルバーニングの飛行させる。コロシウム内は広いから試しで飛ばすには十分すぎるほどだ。

上下や高速飛行を軽く試しながら、飛行の感覚を確かめる。速度を上げれば軽いGがかかり、飛ばしている。

『だが——本当に良かったのかね？ チュートリアルミッション無しでいきなりのバトルで』

「ま、習うより慣れろって質なんですね」

答えつつ、操縦桿を弄っていく。

それに従いソウルバーニングが動き、各部のスラスタから光が噴出し加速や減速、停止を行っていく。

「んー」

一度首を傾げ、

「やっぱ地面だな」

飛行を切り、着地した。

※※※

「彼はガンダムを見たことがない。その上でリアルで何か武術をやっていたのかね？」

「へっ」

ソウルバーニングが機体を動かしているのを眺めながらメイジンから発せられた問いに思わずサンタは変な声が出た。

「……なんで分かったんですか？」

「メイジンだからな！」

叫び、

「実際、見れば解る。私に反応しないあたりビルドシリーズは見ていない。そこはまあ、別に珍しくもない。現在GBNは大きく普及し、アニメシリーズ自体を全く見たことないという初心者は今では普通だからね。大体のものは宇宙で戦うロボット……それか、ガンダムベースで立っているやつという認識だね」

その上で、

「ガンダムを知らないものが初めてGBNにダイブし、ガンプラを動かせばまずやるのは——空を飛ぶことだ」

それは現実では不可能だが、GBNでは自在に行えることで最もシンプルで、大きく、何より解りやすい。

ガンプラを触ったことがなかるうが、ガンダムというアニメを見たことがなかるうが。

それは誰にだって解ること。

そして、初心者だろうが上級者だろうが魅了するものだ。

GBNの場合、どんな機体でも飛行スキルを付与すれば飛べるために初心者でもログイン直後から飛ぶことができる。故に、概ねの初心者はまずは空を飛び、その感覚に酔いしれる。

「だが、グレン君は軽く確認した程度で地面に降りた。高所恐怖症や感覚のズレに慣れないから、といったものではなく自分の意志で、だ。そういった場合、GBN以外、リアルで武術ないし体を動かすスポーツの類をしていた場合だ。GBNでは地上において現実の動きをシームレスに再現できるからね。ビルドダイバーズのリク君も足技が素晴らしいが、現実でサッカーをしていたという話も聞く」

その上でウインドウを見る。拳や足を繰り出したり、加速器を使ってダッシュするソウルバーニング。

「そして彼の動きは戦い慣れたそれだ。ただ体を動かすスポーツではなく、対人を想定された武術の、ね」

「……はえええ。さすがメイジンですね」

「ふっ、造作もない」

「メイジンの言う通り、グレンはリアルでまあ武術……というか、戦い？ ……その、

まあ慣れるつちや慣れてますね。だからいきなりバトルつてのも大丈夫だと思いましたがし」

何やら話にくいようにサンタが頬を掻く。

「ふむ？ ……まあリアル突っ込むのはマナー違反だね。GBNは自由だがマナーは大  
事だ」

肩をすくめながら、ウィンドウを注視する。

「しかし気になるのは、この機体だが……」

小さくつぶやき、グレンへ語り掛ける。

「グレン君、どうだね？」

『ん、あー、うん。大体感じは掴んだ。もういいよ』

「よかろう！ では外部からコロシアムのマッチング機能をオンにする。今回はナビ  
ゲートのために私が行うが、次回からは自分で頼むよ」

『ありがとう』

メイジンがウィンドウを操作し、マッチング機能をオンにする。

読み込み画面が数秒表示され、

「——来たぞ」

『BATTLE MATCHING!』

どこかの誰かが、フリー募集されていたグレンのバトル枠に申請を掛け、バトルが成立する。

「グレン君」

『おう』

「楽しみたまえ——ガンプラバトルを」

※※※

コロシウムは変わらず、二機のガンダムが向かい合う。

赤を基調としたソウルバーニングと白を基調とし、巨大な剣と左肩に小さな翼のような装備を持つガンダムだ。見るからに近接用だが、左腕の手首に二つ大きめの銃口が付けられている。

『ソードストライクガンダムだな。近接用のストライクガンダム、君のソウルバーニングも大元をたどれば同じ機体だ』

『見る限りほぼ素組み、左腕の手首のサブマシンガンだけ追加してる感じかな？ 中距



離の補助だろうから、メインはやっぱり近接だろうね。ガンプラの出来はこっちの勝ちだよ』

『初戦としてはやりやすい相手だろう。思い切りやりたまえ』

戦闘フィールドは特徴のない円形のコロシアムのままで。

天蓋は閉じられているために空中戦には適さないために、地上戦向けかつ、初心者向けと言えるフィールドでありその為にメイジンが設定したものだ。向こうもそれを見越して、というわけではないだろう。グレンとそう変わらない初心者がコロシアムのフリーバトルに参加して自分の機体と戦いやすい場所に合わせて来たのだ。

「ふうー」

ソウルバーニングが腰を落とす。

左に拳を握り、右手を開き。

「——さあ、どうだ？」

胸の前で左拳を右手の平にぶつける。

その後に右手を緩くに構え、左手を開いたまま腰あたりに置く。

対するようにソードストライクも両手で巨大剣を握り正面に構える。切っ先は真っすぐにソウルバーニングへ。

ソウルバーニングの赤とソードストライクの黄色の瞳が輝き、

『BATTLE START!』

同時に、二機が前に飛び出した。

ソウルバーニングは自分の足で、ソードストライクは背部の噴出機を使ったロケットダッシュ。

赤は拳を、白は大剣を振りかぶり、真つすぐ激突する構図だ。

初心者同士の地上戦、そこに細かいマニユールは発生しない。ガンプラでの戦闘をグレンはまだ知りえていないし、ソードストライクのダイバーも同じだろう。真つすぐ突っ込んでぶちこむという、きわめて分かりやすい。彼我の距離は一瞬で縮まってきた。

「よっ」

——激突の二歩手前で、ソウルバーニングがスラスターを用いて急加速を行った。

『!』

ソードストライクが驚きで一瞬揺れる。だが、激突と攻撃はもう止められず、反射に近い形で大剣が振り下ろされた。

だが、背部だけではなく、踵のスラスターも吹かしたソウルバーニングの方が早かった。

赤の蹴り上げが、振り下ろされる直前の大剣を握った両手に直撃する。

激突の音が響き、ソードストライクは大剣を落しながら仰け反る。対し、ソウルバーニングはさらに背腰部のスラストアーチャーを用い体を押し出す。

そのまま、押し込むように残っていたソードストライクの右膝の関節部を押しつぶす。

「意外にもろいな」

つぶやきつつ、ソウルバーニングは止まらない。

膝から下を失い、崩れ落ちるソードストライクを見据えながら、押しつぶし大地を踏みしめた右足を軸に体を回転。機体をコンパクトにまとめつつ、左膝をソードストライクの頭部にぶち込んだ。頭部が吹き飛ぶが、

「あ、これじゃ止まらねーか」

ガンプラの頭は基本的に感覚器官なのでつぶれても死なない。エネルギーゲージが設定されているGBNなら猶更だ。

だが、片足と頭部を失ったガンプラは概ねまな板の鯉に等しい。

崩れ落ちていた機体の両脇を掴んでから一度持ち上げ、地面に叩きつけた。

「トドメだ」

ダメ押しと言わんばかりに、踵落としを胴体の叩きつける。

『YOU  
WIN!』

※※※

「——ふう」

勝利のシステムアナウンスを聞き、息を吐く。  
首を鳴らしつつ、

「こんなもんか、GBN?」

※※※

「なんと……!」

わずか数秒で着いた決着にメイジンはサングラスの奥の瞳を見開いた。

一方的と言つていい勝利。事前の確認から良い動きだとは思つていたが、ここまでとは思わなかった。

「……サンタ君、マナー違反とは知りつつも聞かずにはいられない。彼は、リアルで何を？」

「あーっと」

彼の幼馴染は苦笑しつつ、

「有体に言えばヤンキーですかね」

「は……？」

「地元の学校らへん、あんまり治安良くなって昔のヤンキーみたいなのたくさんいたんですよ。グレンは昔からリアルでもガタイ良くて、よくケンカ吹っ掛けられて。それでまあ返り討ちにしてたら——高2ん時は地元じゃ負け知らずの喧嘩屋ですよ。受験もあつてその高2で卒業して勉強に専念してましたけどね。GBNも昔から誘つてたんですけど、ヤンキーがGBN初めてガンダムベースで喧嘩起きたらまずいだろつてずっと断られてたんですよ」

その上で、受験に一区切りついたから誘えたのだが。

格闘特化のトライバーニングの改造機がグレンになら扱えるかと思つたのはそれが理由の一つ。

それだけではないのだが。

「なるほど、いやはやなんというか」

思わずメイジンが苦笑する。

どういうわけか本人に熱量を感じないため、姿が被る、ということはないのだが。自分のものではないが卓越したガンプラ。

ガンダムもガンプラも知らない初心者。

その上で卓越した本人の格闘能力。

アバターとはいえ、燃える炎のような赤い髪。

それはまるで、

「カミキ・セカイ。バーニングな男を思い出させるじゃあないか……！」

## 掴め、星光

にわかにGBNのエントランスロビーが騒がしくなる。

元々初心者中級者熟練者問わず集まり、賑やかな場所だが多くのものホロウインドウを広げ、それを見ながら会話をしている。

「コロシアムのフリーバトル、凄いことになっているぜ」

「こいつ、ほんとに初心者？ 全然そんな感じじゃないけど」

「というか機体がそもそも初心者じゃないよね。トライバーニングの改造機で、この完成度って」

「ふふふ……面白い」

一様に見ているのはコロシアムのフリーバトル。一時間ほど前から続けられている一人と一機のバトルだ。

天蓋付き地形効果なしのニュートラルフィールドにおける1on1。

元々コロシアムにおけるバトルは自由度の高さと空間がある程度狭いから無駄に戦いが長くなることもなく、且ある程度ランダムにマッチングが行われるためにダイバーのランク問わずに一定の人気はあるものだ。ハイランクミッションやトップランカー

同士のバトルほどに注目を集めるわけではないがそれでも安定した注目度がある。

連戦も可能であるために、畢竟初心者がバトルをひたすら続けることで注目を集めることが可能なのだ。

今のグレンとソウルバーニングガンダムのように。

「全く、実に大したものだ。グレン君」

ウインドウの中、両肩が巨大な球になっており、鎖が伸びるモビルファイター——ポルトガンダムの地面に叩きつけて勝利を決めたソウルバーニングヘメイジンは素直に賞賛を送る。

「この一時間、19に及ぶ連戦を熟し、その全てに勝利していくとは。並みの集中力ではないな。ふっ……まったくどこに逸材が転がっているか分からん。これだからガンブラバトルは面白い」

「んー、でもなんか気づいたらやたら注目されてますねグレン」

「初心者がここまで暴れればこうもなろう。最も、一番大きな理由はそれだけではないだろうが」

ただのニューピーが連載している、だけではこうも話題にならないだろう。

「シンプルな話だ。偶然とはいえ、あそこまで——」

「失礼、メイジン」



「ん?」

背後から声が掛けられ、振り返り。

「……!」

メイジンは目を見開いた。

つられて声の主を見たサンタもまた同じように目を丸くさせる。

「何やら面白いことが起きているようで、もしよろしければ私も一枚噛ませていただけませんか?」

その声は鈴が鳴るように。

白銀のショートカットに白のワンピースに淡い空を思わせる色のジャケット。胸元の桃色の大きなリボンがクールな雰囲気にも愛らしさを重ねている。

黒の手袋に包まれた右手を左胸に当て、左手を広げて頭を下げる姿はまるで舞台女優のように。

透き通るような透明感を持ちながら、それでいて思わず目を惹きつけられるような優雅さを持つ少女だった。

「——君は」

「あの彼。私としては、どうしても無視できませんから」

※※※

「ふー」

19戦目を終えて、コックピットの中でグレンは息を吐く。

度重なるバトルで疲労している、というほどではない。グレンからすればかなり体が温まってきたという具合だ。

「んー」

息を吐く。

長く吐き出していく。

体は温まっているが——心に火は付かない。

「悪くはないけどな」

独り言を呟きながらウィンドウを眺める。表示されているのはソウルバーニングの機体状況だ。バトル中の機体の部位へのダメージやエネルギー状況が表示され、初心者のグレンでもぱっと見何が起きているかが理解できるもの。

「だけど、これなんだ？」

機体の表示の隣に、何のか分からないゲージが一つある。戦闘中に上がったたり下がったりしているが、これまでの闘いではゲージが満タンになることはなかったために目的が分からなかったのだ。戦闘時間が延びれば延びるほど、激しく動けば動くほどに伸びていくからダメージの表現でもしているのかとも思うが、それだと元々のエネルギーゲージとの併用されている理由が分からない。

「んー、よくわからんなお前。思い通りに動くのはいいけど」

操縦桿を軽く小突き、苦笑する。

もつとも自分が作り上げた機体ではないのだから当然なのだが。GBN、ガンプラバトルは本来自分で組み上げたガンプラを使うというのにレンタル機体でここまでやってもいいのかとも思うが、

「まあ、続けるかも分らんしな」

嘆息し、顔を上げ、

『グレン君、まだ戦えるかね？』

「うん？ まー行けるぜ」

『結構。実は是非君と戦いたいというファイターがいてね。ただ、これまでのニューピーや下位ランカーではなく上位ランカーと呼ぶにふさわしい者なのだが、それでもか

まわらないかな」

「構わんよ」

問いかげに即答する。

実際のところ、歯ごたえがなくて退屈していたところだ。

『ふっ、頼もしい』

ウインドウ越しにメイジンが笑う。

『この戦い——まさしく宿命と言ったところか』

※※※

その機体は一目でこれまでと違うものだということが分かった。

エメラルドグリーンと白の包まれ、右肩に翼を模した巨大な剣、左手には身の丈もある鋭い槍。胸には宝玉のようなスファイアコア。鋭角的なボディはしかしどこか女性的なラインを描いている。腰から延びるエネルギー状のスカートがそのイメージを強調させているのだろうか。頭部の一对の耳がどこか猫を思わせるのがコミカルだ。

『——ガンダムSSクアンタ』

機体の名前はメイジンから——ではなく、新たに表示された白髪の少女から発せられたものだった。

「うん？ ああ、アンタが相手か」

『——ふむ』

話しかけたつもりもなかったが、彼女もまたグレンの言葉には反応せず一人小さく首を傾げた。

『見た目を成長させてる？ 声は……まあ、追加課金が必要だし仕方ないか。機体は120点だけど……キャラロールは……』

「ああん？ 何言ってるんだ？」

『——失礼。貴方、お名前は？』

「グレンだ。あんたは」

『——シア』

その名乗りは、誓うように、祈るように。

大きい声ではなかったが、しかし確かな意思が込められていた。

『キジマ・シアスタルよ。ただ、シアと呼んでほしいわ』

そして向けられた視線は何かを期待するように、上目遣いで。

とんでもない美少女だなあと素直に思った。

アバターなので何とも言えないが。

「はあ。よろしく、シア」

『……』

何やら不本意だったらしくあからさまに眉をひそめられた。

何なんだろう、この少女は。

『……温い』

「あん？」

『いいえ、始めましょうかグレン』

返答する間もなくウインドウが閉じられた。

変な女だと、思った。

首をかしげながら、操縦桿を握る力を強める。テンションはともかく体は温まっていてコンディションは良いのだ。

シアという彼女は上位ランカーだというのだからどれほどのものなのか、それも少し楽しみではある。

改めて、緑の機体を見据え、

『BATTLE START!』

宣言と同時に操縦桿を押し出した。

どう動くかのセオリーを、グレンは知らないし、そもそもソウルバーニングの攻撃手段は殴るか蹴るか。それに体当たりと頭突きくらい。故に接近しなければ話にならない。銃火器系やビームライフル系の攻撃もこれまでに何度か受けることによってなんとなく回避のコツも掴んでいる。

故に進む。

コックピットがソウルバーニングの疾走と共に振動を再現するのを感じながら距離を詰めていく。

対しシアのSSクアンタは動かなかった。

大きな槍を地面に突き刺し、空になった手はだらりと下がっている。

明らかに無防備の構え。

構わずに行った。

SSクアンタに動きはなく、目前までたどり着いても同じ。

だから、拳を叩き込み、

「あ？」

気づいた瞬間にはソウルバーニングの機体は宙を舞っていた。

「んなっ………！」

慌てて操縦桿を引く。

それに従い、両腕をかぎすことで頭部から地面に突っ込むのは避けられた。咄嗟の動きだったが、自分をほめていいだろう。そのままの勢いで、肘を思い切り伸ばす。

ソウルバーニングの機体は妙に関節部が硬く、パワーが出ているのだろうが、思い切り操縦桿を操作しないとまともに動かない。不格好なハンドスプリングを行う形になり、その最中で胴体部を捻ることでSSクアンタに向くように着地する。

『温いわね』

SSクアンタは、ゆっくりと振り返った。

たったそれだけの動作に妙な感慨をグレンは覚える。上品さ、とでもいうのだろうか。操縦するシアから、あるいは彼女自身が作成したガンプラだからなのか、一種の美というものを覚えさせられる。

『次元霸王流は？ バーニングバーストは？ カミキガン普拉流はどうかしら』  
音声通信のみの声で語り掛けられる。

そのどれもが、グレンの知らない言葉。

『貴方は——セカイなのかしら？』

「何言ってるかちよつと分らんな！」

言い返しつつ、再びグレンは操縦桿を前に押し出した。



※※※

「うっわー、ある意味夢の対決、ですかね？」

「ふむ、確かに作中ではこのマッチングは見られなかったね」

「これまでと同じようにサンタとメイジンはウインドウ越しでグレンの戦いを見ていた。

これまでと違うのはバトルの中でグレンは完全にあしらわれているということだ。

「噂では聞いてましたけど、実際に見るのは初めてですね。キジマ・シアのロールの上位ランカー」

「私も会うのは初めてだ」

キジマ・シア。

それは実在の人物ではなくアニメ『ガンダムビルドファイターズトライ』に登場するキャラクターの一人だ。

作中ではヒロインの一人であり、同時にヒロインであるホシノ・フミナのライバル的

存在。作中プリマと称されるファイターでありながらトライにおいては最上位のビルダー技術を持つ美少女である。

「GBNにおいてはアニメキャラのなりきり、ロールプレイをするものは珍しくもない。……ない、が。彼女は少々特殊例だな」

「と、いうと?」再現度は滅茶苦茶高いですけど」

「うむ、原作キャラの際立った再現度の高さこそこのGBNにおいてはある意味異端とさえ言ってもいいものだ」

ソウルバーニングのハイキックを軽い動きで手を添えることで受け流したSSクアンタの技量に関心しつつ、

「これはあくまでアニメキャラの完全再現という視点で見た場合なのだが。GBNにおいてこれは聊か矛盾していると言っている」

「はい? アニメのガンダムとか再現できるのも魅力じゃないです?」

「肯定しよう。そして訂正するのならば自分好みに好きに作ったガンプラを使えるというべきか。その過程で憧れのパイロットのようにもなれるし、お気に入りの機体を用いることができる」

だが、

「根本的な要因として、GBNダイバーはリアルに生活を持つ人間だ」

ここ数年ではエルダイバーというGBN内で生まれた電子生命体の存在もあるが、それは今は置いておくとして。

「お気に入りキャラのロールというものはGBNを始める際においては非常にとつかかりが良いものだ。方向性がはつきりしているし、操縦や戦術の参考にもある。ダイバーはそれらを用い、経験を重ねてランクを上げていくわけだね。そして、実際に動かしていく過程で自分だけのガンプラを積み上げていくのだ」

ある程度の初心者でなければ誰もがそうやってガンプラを楽しんでいく。

人気の傾向というものは確かにある。例えばトランザムなどが最たるものだろう。ガンダムOOにて登場した瞬間強化はGBNではスキルとして実装されており、OO由来の機体でなくても発動が可能なのだから。Cランク以降から解禁される必殺技などもダイバーとしてのオリジナリティの最たるものと言える。

「そう、我々には自我がある。己だけのガンプラへの愛が。いかにこのGBN、ガンプラ、ガンプラバトルと向き合うか。それぞれがそれぞれのやり方を持っている。そしてその愛をGBNは肯定し、大好きを表現することができるのだ」

だから、

「完璧な原作キャラロールというのは難しい」

「……………あつ」

「ダイバーとして経験を重ね、スキルを上がるほどにどうしたってダイバー本人の色が生まれてくるものだ。それは本来であれば素晴らしいことなのだが完全再現という意味においては邪魔……というと語弊があるが余計になってしまふのだよ。結果として生まれるものはオリジナルのキャラではなくダイバーのオリジナルなのだから」

それは素晴らしいと、メイジンは繰り返す。

「だから、完全ロールは難しいのだ。完全なロールをするくらいにGBNを経験すればするほどに個人の愛が生まれるからね。もちろんエッセンスや参考として残ることはあるし、ある程度のキャラロールは珍しくもない。武装や装甲、カラーを自分好みに変換するのはGBNの醍醐味なのだから」

念を押すように言葉を変えて個人の愛を肯定する。

サンタとの会話ではあるが、近くにいるダイバーがこちらの話を聞いている気配があるからだ。

それを心を止めつつ、話を続けた。

「故に完全再現を目指すということはこのGBNにおいて己を殺す鋼の精神力を持つか、趣味嗜好が原作キャラクターと一致しているようなガンダム馬鹿のどちらかというわけだね」

「……ちなみに、メイジンの場合は？」

「ふっ……あえて言おう、後者であると！」

なぜならば彼は三代目カワグチ・メイジン。

自分とかかわった人間が超高性能のNPDなんじゃね？　と言われるのを知っている男だ。

「彼女、キジマ・シアスタルの場合がどちらかは分からないがしかし恐るべき再現度だね。名前はアニメでシア君が所属していたチーム・ソレスタルスファイアをもじっているがリスペクトの一環だろう。機体はガンダムOOシアクアインタの改造機。アバターも本人とそんな色なく、あの声も追加購入で使用できるシア君の声優、藤田咲氏の声帯ソフトを用いているのだろう。アバターはともかく、声はなかなかできるものではない。――

——高いからね」

キャラメイク時に用意されているボイスバリエーションや地声をいじるのではなく完全に他人の、それも声のプロのものを使っているのだ。

ソフトの作成自体に手間がかかるし、権利問題が色々あるので実装されているキャラクターも限られている。

使いつけるだけでかなりの金額を必要とする誰にでも購入可能だが、購入するものはそこそこレアな仕様である。

あくまでそこそこ、なのがガンダムとGBNの人気の証明だろうが。

「さらに言ってしまうとこれはキャラによるんだが、ファイターとしてのスキルも必要になる」

「うん？ GBNは別にガンブラ以外でも楽しめるじゃないですか」

「逆に聞くがサンタ君。アムロ・レイが素組みの量産型ザクにぼろ負けしたらどうかね？」

「あー……ちよつと、いやですね」

「うむ。ちよつと、ね。原作で高い戦闘力を誇るのであればその再現もしたいところだろう。何より再現する本人がそう願うはずだ」

そして、

「そういった観点から見ても——彼女は見事の一言と言う他ないな」

※※※

「——はっ」

頬を伝う汗に構うことはなく、グレンの口から笑みが零れた。

ソウルバーニングガンダムが片膝をつき、動きを止める。  
手も足も出ない。

一言でいえば、そんな状況だった。

徒手空拳の全てをSSクアンタは思わず笑ってしまうくらいに無駄なく洗練された、柔らかな動きで捌き、鋭い反撃を叩き込んでくる。一撃一撃で笑ってしまうくらいにエネルギーゲージ削れていくほどだ。

「なるほど……上位ランカー。これはすごいな」

こちらの攻撃はまともに当たっていない。

一方的な状況。

あと数度殴られればこちらが負ける。

——チリリと、胸の中で何かが揺らめいた。

「これは、想像以上だぜシア」

『私は、期待外れだったわ』

聞こえてくる冷たい声に苦笑する。

何やらががっかりさせてしまっていたらしい。彼女の事情は分からないが、それだけでは分かる。

グレンはガンダムアニメをまるで知らないのだから無理もない。

キジマ・シアをほぼ完全再現している彼女が、要素だけみればファイターズトライの主人公カミキ・セカイを再現しているグレンに対して宿命の如き出会いを期待していたなんて思いつくはずもないのだ。

『だから、終わりにしましょう』

SSクアンタが地面に突き刺していたGNパルチザンを手に取り、ソウルバーニングを向ける。

GN粒子——それを再現するブラウスキー粒子が収束しGNレーザーをチャージしているのだ。

当たれば敗北するだろう。

さて、どうしたものかとソウルバーニングが立ち上がり、

「……………んん？」

コックピット内、機体表示ウィンドウに何やら初めて見る表示が出現した。見れば、謎のゲージが満タンになっている。

何か隠し玉かと思いいウィンドウを操作するが反応せず、操縦桿や付随しているトリガーを引くが反応しない。

『……………？』

その動きが機体にも反応したのかSSクアンタも怪訝そうに槍を下げる。



『どうしたね、グレン君!』

「あ、メイジン。なんか変な表示が出てきて、なんか使えそうなんだけどなんか全然反応しなくて」

『むっ……? それは……』

彼は一瞬考え、

『おそらく音声認識によって起動するタイプのものだ。バーニングバーストかね!』

「えーと……なんか違う」

『なるほど! では私にも分からん! 折角だ、大きな声で叫び、その何某かを発動するんだ!』

「ぶっつけ本番かよ」

思わず笑った。

だが——悪くない。

チリリと胸の中で何かが揺らぎ——バチリと、火が付いた。  
撃鉄が鳴り、燻っていた種火に炎が灯るように。

「——燃えて来たぜ」

『今更何をしようとも!』

GNパルチザンの光が強まる。

そして量子ビームが放たれる直前に、グレンは叫んだ。

「ソウル・ユナイト！」

宣言と共にウインドウが表示を変える。

機体を中心に三角形の図が。それぞれ赤、黄、青が結ばれたトライアングル。各色にまた一つ一つ名前らしきものがあり、そのうち黄と青が点滅している。

中央に、おそらく続く起動ワードが。

「ウイニング——イグニッション！」

同時に量子ビームが放たれ、そしてそれよりも前にソウルバーニングの固有システムが起動する。

腰に纏っていた8本の棒状装甲が、全身に巡らされたレールを伝い腕へと移動。各装甲が展開し、内部のプラウスキー粒子許容体であるクリアパーツが露出しながら両腕を覆い、装甲となって二回り大きな腕を形成していく。

「だ——らっ！」

合一と同時に迫った量子ビームを——握りつぶした。

『なっ……!?!』

『なんと!?!』

『わ、そうなるんだ』

シアとメイジンの驚き、サンタののんきな声が耳に届く。

巨大化した腕と全身のクリアパーツが黄色く輝き、頭部のツインアイが赤と黄色の二色に輝く。

アンバランスとさえ言っていない巨腕と黄色い星のような輝きを放つソウルバーニングガンダム。

その名は、分かりやすくコックピット内のウィンドウに示されていた。

「ソウルバーニングガンダム——スターウイニングフレーム」

## 奔れ、雷光

ビームを握りつぶす異形のガンダム。

クリアパーツの黄金の輝きは、勝利へ導く星のように。

巨大化した両腕は下半身とのバランスが取れていないほどに大きく、腕を下ろせば地面に着いてしまうほどのサイズだ。

『これは……RGシステムとプラネッツシステム……の亜種!? では、このガンプラの製作者は——』

ウインドウからメイジンから何か言っているが聞き流す。

「——熱いな、ソウルバーニング」

変形した機体からパワーが、熱が伝わってくる。

握らせた拳は先ほどよりもさらに固く、力強い。

『それは、ホシナ・フミナの……!』

SSクアンタが叫びと共に量子ビームを連続して放つ。

それを回避することはなかった。

両腕をクロスさせることで受け止め——ビームが装甲を拡散させる。  
『ナノラミネートアーマー……いや、コート!?』

純粹な驚きの声が耳に届くが何が驚きなのか分からない。追加展開された装甲と掌にあるビームを拡散させる特殊装甲は1年前にGBNに実装されたばかりの最上位加工の一つだから、というのはグレンにはあずかり知らぬところ。GBNでそれを発揮するため専用の超極薄デカールを数枚精密に張り重ねなければならず、実装から1年たった今でも正常に作用する機体がほほえないものだ。

「いいーくぜッ!」

操縦桿を前に押し出し、

「っっておお!」

スターウイニングがバランスを崩して転びかける。慌てて操作し、直立させるが巨大な拳が地面とこすれてしまう。

「んん……じゃじゃ馬……!」

一目見てわかる上半身と下半身のバランスの悪さ。それ故に先ほどまでのソウルバーニングとは動かし方がまるで違うのだ。

おまけに、

「硬いな……!」

操縦桿を動かした感覚が、それまでよりもさらに固い。馬鹿みたいにただ押し出すだけでは振り回されるし、力が弱ければこんどはまともに機体が、特に両腕が動かない。そういう関節の具合だ。

ソウルバーニングを超える扱い難さ。あちらはバトル前の数分動かすだけでコツが掴めたが、そんな易しいものではないし、そんな時間もない。

だつたらと、グレンは割り切った。

「これなら、関係ねえ——ア！」

まともに動くことはできないから。

両腕を思い切り地面に叩きつけて——その反動を使って飛び出した。

『なっ！』

豪快な山なり軌道だが、スターウイニングのパワーだけはとんでもないので速度も勢いも絶大だ。

咄嗟にSSクアンタが飛びのき、しかし流石上位ランカーに名を連ねているシアも伊達ではない。後退しながらもウイニングスターの着地点を予測し、GNパルチザンを振るう。軌道上にGN粒子を再現したプラフスキー粒子が斬撃となって放たれる。

「それは、さつき見た！」

着地の瞬間、ウイニングスターは片腕だけを地面に叩きつける。着地というよりも墜

落到近いが空いた片腕を粒子斬撃にぶつけることで拡散反射しダメージを無効化させた。

『私だってまだ使えていないものを……!』

憎らし気にシアが吐き捨てる。だが同時に、

『——ソードビット!』

左肩の翼のような装備、GNバインダーが機体から分離し、分解。6本のソードビットとなつて宙を駆る。

ナノラミネートアーマーは使用者は極めて少ないが、しかし実装されて一年経っているものだ。当然ながら対処方法は発見されている、というよりそもそもアニメやゲームで登場している。まずそもそも、ビーム兵器ではなく純粋な物理衝撃で相手を叩き潰すか。

或いは、

『全方位のレーザー攻撃!』

『氣を付けたまえグレン君! 君の両腕の装甲は一方方向からのビーム攻撃は拡散無効化できるが、全方位から同時に攻撃を受けると拡散しきれずにダメージを受ける! 今の君の機体では一発で行動不能になるぞ!』

「ハッ———そこなくっちゃなア!」

ウイニングスターを中心に展開されたソードビットは全て目で追いきれない。かうじて光の尾が拾える程度。

だが、狙いは全てウイニングスターだ。

「ツツ——バーニング！」

腹の底から吠え——ウイニングスターの両腕を思い切り回転させた。

発生する膨大な遠心力。同時に両腕の肩と二の腕に装備されたプラウスキー粒子スラストを最大噴射。二つの力により生まれたのは局地的な竜巻だ。

その竜巻が量子ビームを弾き、反射させ、ウイニングスターの体を傷つけさせない。それどころか、偶然ではあるが反射したレーザーの一つがソードビットに直撃し、破壊する。

「——やるわね」

『見事！　だが……！』

『ソードビットは止まらない』

残った五機のソードビットの内、二つがSSクアンタの下に戻り、GNパルチザンと結合。残り三機が再びウイニングスターを取り囲む。

竜巻を作ればGNパルチザンの量子光線でぶち抜き、ナノラミネートコート自体は各方向からのビームで反射を防ぐ手筈。



シンプルで無駄のないトドメの態勢だ。

「ピンチ……！」

思わず冷や汗が流れる。

シアの詰みもそうだが、先ほどのガンダムコマは普通にグレン自身にも負担がかかった。

再現された疑似重力と回転により軽く吐きそう。だから竜巻防御を再現することはできない。

そして、今のグレンに三方向全てをナノラミネートコート両腕を使って防ぐことはできない。

ソウルバーニングガンダム・ウイニングスターではこの状況は切り抜けられないのだ。

「だったら」

機体表示に視線を落とし、そして笑う。

答えはそこにあった。製作者のことは誰だか知らないが随分と親切なのか、凝り性だったのだろう。

「——ユナイトシフト！」

ウイニングスターの表示が解除され、再び生じる三色のトライアングル。

点滅する二色。赤と青。ソウルバーニングではどうしようもない。だつたら選ぶべきは一つ。

「バーニング・ウイズ・ライトニング！」

宣言と同時に、直前までウイニングスターの両腕を構成していた装甲が棒状に戻りながら、ボディのレールを伝い移動。

棒状装甲——エグゾフレームは下半身へと至り、再び展開する。両足に4本づつ、腕と同じようにそれらが外装となつてソウルバーニングの足に装着され二回りは大きな足が構成される。

同時、SSクアンタとソードビットから量子レーザーが射出され、

『!?!』

標的の姿が掻き消えた。

それに気づいたシアは着弾に構わず即座に機体状況を確認し、そして周囲へのレーザーを確認する。

反応は、SSクアンタのずっと背後。

コロシアムの外壁地点。振り返り、見た先にいたのは外壁を踏みしめながらも赤と青のツインオッドアイを向けるガンダム。

両足に青く輝くクリアパーツから弾けるスパークは鋭い稲妻のように。

「ソウルバーニングガンダム——ライトニングストライダーフレーム！」

※※※

「なんとという機体だ……！ よもや、二度の形態変化とは……！」

ライトニングストライダーへの変更を目にし、メイジンは驚愕を隠せなかった。

「トライバーニングガンダムを基に輝くクリアパーツはRGとバーニングバースト。変形し、ナノラミネートコートを持つのはガンダムフレームの改造か？ 内部骨格であるガンダムフレームを外骨格かのように纏うとは……！」

一年半前、エルドラミッションの直後にビルドファイターズの機体が実装された。その半年後に鉄血のオルフェンズが。さらにその半年後、つまり半年前にファイターズトライの機体がアップデートによりGBNに誕生した。元々ファイターズ系列は既存シリーズの改造機だから大きな影響はさほどなかったが、オルフェンズの実装にはナノラミネートアーマーやガンダムフレームなどの登場により大いに盛り上がった。

特にガンダムフレームはリアルでの価格の安さと作成難度の低さから——ナノラミ

ネットアーマーを除けばだが——初心者向けだったと言える。

元々オルフェンズ系はそのナノラミネートアーマーの使用上、泥臭い近接戦が多い作品であった。

その上で、ソウルバーニングガンダム。近接戦闘のみを行うトライバーニングガンダムにその要素を付け加えるというのはむしろ極めて順当と言っている。

故にあの機体は、

「あのエルドラミツシヨン後の1年間のGBN、その集大成ともいえる機体！ サンタ君！ あれを作れるビルダーを私は過分に一人しか知らない！ 何故あれがレントアル機体に!？」

「どうも隣町だったらしいんですね。あの人のリアルと。で、店員に聞く限りじゃ『作ったはいいいけど俺には必要ないからうまく使ってほしい』って」

「……………なるほど！ それもまた宿命!!！」

身もふたもない地理的な話である。

だが、そう宿命。

ただ偶然、手にしたが故にそれは宿命だ。

カミキ・セカイをなぞる様な少年が、キジマ・シアのロールの少女と戦っている。

それをそう呼ばずに何というのか。

「しかし……グレン君。最初とキャラが変わっていないかね？」

「ああ、火が付いたんですよ」

「火？」

メイジンの問いに、サンタは苦笑した。

「あいつは昔からなんというか、スロースターターで。基本的に器用で、才能もあつてやればなんでもできるですけど、やる気にならなくて。中学から高校の時は喧嘩に火が付いて地元でテッペン取って、去年からはうちの姉に教えてもらいながらも勉強に火が付いて1年で大学の推薦貰って。その後火が消えてたんでGBNに誘ったんですよ」

サンタが大好きな世界で幼馴染の火が付けばいいと思つたから。

火が付くのは遅いが、燃え始めれば大きな炎になりうるということを知っていたから。

そして、今、

「君は友達思いなのだな」

「いやいや普通ですよ」

だって、

「幼馴染と一緒に遊びたいってだけですから」

ただそれだけだ。

「さてここからどうなるかな？」

※※※

「どーすんだこれ……！」

グレンは笑いながら声を上げた。

ソウルバーニングガンダム・ライトニングストライダーフレーム。

それはウイニングスターと同じくらい、それ以上のじやじや馬だった。ライトニングストライダーの追加外骨格装甲の機能の大半がプラフスキー粒子の加速スラスターだ。それらによって生じる加速度と速度は尋常ではないもの。

コロシアムの直径は約250メートル。その3分の2を一瞬で移動可能であり、最高速まで加速すれば音速を超えることも可能。

だが、それゆえに飛行中の扱いは非常に難しい。

「すまん、ソウルバーニング！」

それは飛行などと言えるほどまともなものではない。

外壁から飛び出したと同時に、スラスター制御が甘かったのか真つすぐに飛ぶことが

できずに外壁をぶち当たり、削り円を描きながら強引に飛ぶ。

真つすぐ飛ばうとするも、何度か外壁をバウンドし、ようやくまともに進んだと思えば、

「このっ……！」

低く飛ばれば地面に、上昇すれば超速度故に天蓋に激突する。

それでも頭部や胴体などからぶつかって、エネルギーゲージを削り切らないあたり、サンタにやれば何でもできると言われるグレンのセンスの現れだろう。

『……なにあれ』

滅茶苦茶な飛行に、思わずSSクアンタの動きを止めてシアも呆れてしまう。

速度だけは大了なもので、ソードビットでも負いきれないほどなのだが如何せんマニューバが酷すぎる。

『白けるわよ。ちよつと、それ解除したほうがいいんじゃない？』

「言ってくれ……！」

それではソウルバーニングに、ライトニングストライダーに申し訳が立たない。

「もつと……もつとだ……！」

疑似重力に歯を食いしばりながら操縦桿を握りしめる。スラスタを点滅させるように吹かし、機体制御のバランスを探る。

一瞬でいい。

今必要なのはその一瞬。

最初と同じように外壁へ着地し、

「バーニング」

一瞬だけ、全ての加速器をSSクアンタへと至るために全開にした。

瞬間的に生じる疑似重力と膨大な加速。だが、それを制御するための外骨格スラスタを操縦し続ける技術はグレンにはない。

だから——加速の直後に、外骨格スラスタを全てオフにした。

『——上手い！』

メイジンの声上がる。

終着点へ向け出発点のみ加速し、それまでの間はソウルバーニングの背や腰の通常スラスタのみでの姿勢制御。

物理法則エンジンが働き、慣性の法則が再現されているGBNだからこそ。強襲の最中で体の上下を入れ替え、足をSSクアンタへ向ける。

「オ——リアツ！」

ぶち込んだ。

SSクアンタはGNパルチザンで受け止め、その瞬間に外骨格スラスタを再点火。



『ツツ——』

「おおおおおおおッ!!」

操縦桿を無理やりに押し込む。接触状態であれば、もはや精密操作は問題ではない。グレンは胸の中の熱を自覚した。

燃えている。

熱くなれと。

もっと熱くなれと。

そうでなければ、この白翠を倒せないから。

この一瞬に熱を叩き込み、

『——温いわ』

「あ?」

ふわりと、機体が浮いた。

感じる既視感。

盛っていた炎が、絶対零度の風にかき消される。

一番最初の時にマニピレーターでやられたことを、彼女はGNパルチザンで行ったのだ。

だが、最初とは状況が違う。ライトニングストライダーの最大加速。それすらも彼女は受け流し、勢いを消失させる。

一体どれほどの操縦スキルとそれ実行させる機体性能。

雷撃の如き蹴撃すらもその繊細極まる技量の前ではそよ風のように。

燃え上がりかけていた炎が——かき消される。

そして今度はグレンのリカバリーも間に合わない。

しかし、SSクアンタに遅れはなく。機体を翻し、GNパルチザンを振り上げた。

——その光景に、胸の奥に何かが焼き付いた。

ウインドウ一杯に天蓋とライト。逆光の中にあるのは、鋼の巨人。

美しいと、素直に思った。

忘我を許さない状況だったのにも関わらず、思わず見惚れてしまった。

時間が止まったかのように。

何かが、奥底で揺らめいた。

「ガッ——！」

直後、白翠の槍が自分の鋼の体にぶち込まれる。

コックピットが揺れ、仮想空間故に痛みがないが純粹な衝撃が全身を襲い、

『YOU LOSE ！』

『弱い』

「っ……」

音声のみのウインドウから、対戦相手の声が届く。

凜とした銀嶺の声は、しかし絶対零度の切れ味。

「期待外れだわ——偽物さん」

その言葉に——胸の奥で何かが燃えている。

※※※

「お疲れ、グレン」

「おう」

「素晴らしいバトルだった。GBN1日目とは思えない」

「ありがとう」

バトルを終え、エントランスロビーに戻りグレンはサンタとメイジンに迎えられる。

つい先ほどまでグレンのバトルを見ていた観客も、最後のバトルへの感想を口にしなから散っていく。

「どうだったよ、ガンプラバトルは。燃えたか？」

「んー」

サンタの声を受け流しつつ、グレンはロビーを見渡した。

「あの女は？」

「シアスタル？ エントランスじゃ見てないから別にフィールド行ったか、ログアウトしたんじゃない？」

「そうか」

小さく頷き、グレンはメイジンへ向き合った。

「メイジン」

「何かね？」

「あいつは、俺を通して別の誰かを見ていた。セカイ、だったか？ 偽物だとか」

「ううむ。聊か機嫌を損ねたかね？　確かに少々礼に欠いた物言いだったが」

「いや」

そんなことよりも。

「どうすればあいつに勝てる？　どうすればい——あいつが、俺を見る？」

真つすぐに紅蓮の瞳がメイジンへ向けられる。

バトル中のようなテンションではない。しかして最初の温い雰囲気でもない。

目の奥に、そして心の、魂の奥に、静かに燃えているものがある。

それをメイジンは感じた。

思わず頬が緩む。

その在り方は、

「実にバーニングだ……！」

思わず自分もグレンとバトルをしたいという衝動が沸き上がる。

だがそれは今ではないし、その熱は自分に向けられたものではない。

「グレン君！　今の君に必要なものは二つ！　一つはまずガンプラバトルの技術！　ソ

ウルバーニングガンダムは素晴らしいガンプラだが、しかし君は使いこなせていな

いっ。バトルを重ねこのGBNで学ぶことは多い！」

そして、

「その上で君がそのバーニングなガンダムと共に行くならば、会わなければならない者がいる！」

彼こそは、

「フォース、BUILD DIVERSのヒロト！ そのソウルバーニングガンダムの作成者だ！」

## 受け取れ、想い

グレンがGBNを始めて、シアスタルという少女に敗北して一か月。

その間、グレンは文字通りにGBN漬けの生活を送っていた。ログインしている間はひたすらにガンプラバトルを行いソウルバーニングガンダムとユナイトシステムの経験値を溜め、現実では川崎のガンダムベースでサンター——コウタと一緒にガンプラ制作を。

バトルに関してはコロシウムがメインとしつつも、メイジンおすすめのいくつかのソロミツションを熟し、短期間で順調にダイバーズランクがも上げていった。Cランクに達したため、これでグレンも一応必殺技の獲得資格をクリアしたことになるが、必殺技に関しては長くやっつけてもなかなか発現しないこともあるので無視していいというのがメイジンのアドバイスだった。

グレンの個人的感想でいえばトップフォース虎武龍へ紹介してもらい、フォースリーダーのタイガーウルフとの修業は大きな経験だった。

トライバーニングを乗り続け、近接格闘のみでバトルを続けているグレンだが、これまでほとんど我流の喧嘩殺法だけだったところに武術を改めて学ぶことができたのだ

から。

しかしタイガーウルフというのが虎要素はどこにあったんだろう。

ガンブラ作成に関しても、これまでガンブラを作ったことなどなかったのととりあえず素組みから初めて、スミ入れや艶消し、ミキシング等の技術も学び始め、実際に自分で作ったガンブラをGBNで動かすことも試してみた。

もつともどんなガンブラを組み立てても、ソウルバーニングガンダム超えるものはない。きなかつたのだが。

サンタとメイジン、それにメイジンの紹介でガンプラススキルについてアドバイスくれたシヤフリヤールというダイバー曰く、ソウルバーニングはGBNにおいても最高クラスのクオリティのガンブラであるため、そう簡単に超えるどころか同等のものなど作れないらしい。

何かという愛を連呼する人だったが、何故そんなに愛を叫ぶのだろう。

なにはともあれ、一月でGBNというセカイに慣れて来たグレンは、

「……暑いなあ」

「鬱陶しい時の君ほどじゃないよ」

「なんだとコラ」

サンタと共に日本の山陰エリアの砂丘をジープで走らせていた。



現実でいう鳥取砂丘が再現されたエリアなのだろう、見渡す限りが砂で覆われている。

「あとどれくらいだ？」

「んー、もうちよつとだと思うよ。いや、国内エリアだからって徒歩で来なくてよかったね。さすがに歩いたら手間だった」

「そりゃー砂漠を徒歩で歩く輩はいないだろう。ていうか、ガンブラで飛んでいけばいいんじゃないの？」

「いや、初心者あるあるだよそれ。縮尺勘違いして砂漠歩くとか。場所によってはガンブラで入れない街があるし、そもそもこういう砂漠系エリアだと防塵加工してないと機体に砂が入って動かなくなるからね。だから僕たちもこうしてジープで来てるんだ」

「ふうん。よくできてるなあこの世界は」

空に輝く太陽の眩しさに目を細めつつ、

「おっ？ あれか？」

視線の先、砂丘が終わり海と森。

そして、別荘が一つ。

「うん。あれが、フォースBUILD DIVERSのフォースネストだよ」

「なんでまたこんな砂丘に」

「なんかメンバーの一人が滅茶苦茶推したみたいな噂は聞いたかな。誰かは知らないけど。多分なんかの小ネタだと思っただけどよく分らんや」

「はー、GBNそういう小ネタが多すぎなんだよなあ」

※※※

「ここが例の男のハウスか」

「フォースネストね」

「ジープから降りてフォースネスト、木製のログハウスを眺める。

いかにも別荘という風合いだ。ぱっと見だけでずいぶん快適そうではある。

近くに海もあるし、砂丘が近いという立地上空も広く、夜になれば星も美しいだろう。

見まわし、

「………ん？」

ログハウスの影に小さな子供がいた。

紫の髪の中性的な顔立ち、年は10にもならない程度だろうか。花のような藤色の瞳

をした子供だった。

明らかにサイズの合わない白と水色のジャケットを小さな両手で抱えている。

「えーと……あんな子供もGBNいるのか？ あれも、BUILD DIVERSのメンバーなのか？」

「子供がいるってことは聞いたことないけどなあ。メンバーは5人だったと思うけど……あと、アバターの見た目当てにならないからね？」

「ああそうか」

じっとこちらを見つめてくる子供は何も言わない。

「あー……その君、君はBUILD DIVERSの子か？」

「……………」

返事はない。

じっと、藤色の瞳がこちらを見定めるように向けてくる。

どうしたものかとサンタと二人で頭を抱えかけて、

「アルス、どこだ？ 何度も言うが私のジャケットを……むっ？ 誰だ？」

ログハウスから黒髪の少女が出て来た。黒のノースリーブに胸が白い生地であり、クールな印象の随分な美少女。

目を引くのは——左の二の腕に巻かれた翡翠のアクセサリ。

子供を探していたのだろうが、ログハウスの前にいたグレンとサンタを見つけ、視線が止まる。

エメラルドの瞳が二人を睥睨し、

「……ああ、例のカミキ・セカイロールか。メイジンから話は聞いている。入るといい」

「はは、お客？」

「ああ、そうだ。ヒロトのだから」

「ちちの？」

「ああ。……ジャケットを返してくれ」

「ん」

とてとてとアルスと呼ばれた子供が少女の下へ駆け寄り、足に抱き着く。

彼女はアルスの頭を優しく撫で、グレンたちに構うことなくログハウスの中へ戻っていった。

「……なあ」

「……うん？」

残されたグレンとサンタは思わず目を見合わせ、

「GBNって子供もできるの？」

「結婚システムはあるけど……子供はできないはず」

「結婚はできるのかあ」

※※※

「はじめまして、ヒロトだ。よろしくな」

フォースネストのログハウスの中、リビングのソファに座りポンチヨの少年とグレンは向き合った。

少し離れたテーブルでは先ほどの少女——メイがいて、彼女の膝の上にアルスが座ってこちらを眺めている。

紺色の髪を後ろでまとめた落ち着いた雰囲気少年。どことなく先ほどの少女、メイに似た雰囲気を感じた。

彼がBUILD DIVERSの有名ダイバーであり、同時にGBN屈指のビルダーでもあるという。

1年半前のエルドラミッション。

彼らがトライしたいというエルドラという星を舞台にし、そしてGBNでも大規模戦闘に

発展した大規模ミツシヨンだったという。

それらの動画はキャプテン・カザミというダイバーによって配信されており、グレンもそれを見ることによっていくつかの納得を得た。

彼のコアガンダムプラネットシステム。

それは確かにソウルバーニングガンダムのユナイトシステムのそれに似ているものだったから。

正確に言えばユナイトシステムがプラネットシステムに似ているのだろうか。

「はじめまして、ヒロトさん！ サンタです」

「グレンだ、今日は会ってくれて感謝す……します」

「いや、俺も君に会いたいと思っていただけだからメイジンにはこちらこそ感謝している。……それと、敬語はいいよ」

「そうか？ 助かるよ」

柔らかく微笑むヒロトはグレンのイメージと少し違った。

エルドラミツシヨン関係の彼が映っている画像はほとんどが無表情だったからだ。

もつとも、それからもう1年半が経っている。雰囲気の変化があったのは当然だろう。

「色々ヒロトには話さないといけないことがあるんだけど……先に、一つ聞いていいか

「？」

「うん？」

「そのアルスって子——ヒロトとメイの子供なのか？」

「違う」

「違う」

「そう」

三つの口から同じ言葉が二つ、違う言葉が一つ帰ってきた。

否定をしたのはヒロトとメイで、肯定したのはアルスだ。

ヒロトは眉を顰め困りながら、仕方なさそうに苦笑するというGBNの表情ジェネレーターのクオリティの高さを発揮させ、

「GBNじゃ子供は作れない。アルスは……その、なんというか。俺たちが保護しているELダイバーなんだ」

「ELダイバー……電子生命体ってやつか」

GBNについて学んだことの一つ、この世界にはこの世界だけに生きる電子生命体がいるということ。

自然発生したという新たな命はELダイバーと呼ばれ、この電子の中で生きている。中にはリアルにおいてガンブラの体を持つELダイバーもいるらしい。

「そうだ。私もE.L.ダイバーなんだが、この子は私や他のE.L.ダイバーと違って成長が緩やかでな。私とヒロト、というよりも私たちのフォースで面倒を見ている」

「パルさん。ヒナタさん。カザミ」

一人呼び捨てだった。

「ちち、はは」

「……………」

「何も言わないでくれ。みんな同じような顔をするんだ」

「ちち？」

「すまんなアルス。ヒロトが認知してくれないからな」

「メイ!? 何を言ってるんだ!?!」

「今度ヒロトがアルスのことで違うって言ったたら、ママがこう言えと」

「マギーさん……………」

ヒロトが頭を抱え、メイは無表情のままだった。

「パルが興奮するだろう!」

「ああ…………そういえばヒロトと話していると妙に興奮してるなあいつは。なんなんだ、

ヒロト」

「お、俺に聞かないでくれ」



「ちち、はは。仲良し？」

「どうだろう、ヒロトにその気はないようだ」

「いや、それは語弊が」

「……………結婚されてます？」

「し、してないって！」

ヒロトが頭を抱えだす。その彼に下にアルスは寄ってきて、ポンチョの端を掴み、

「ちち、アルス嫌い？」

「い、いやそういうことじゃないよ？」

「ははと仲良し？」

「あ、ああまあ。うん」

「けっこん？」

「結婚はちよつと忘れてくれ……………！」

純粹な瞳で真つすぐ見つめられ、ヒロトの冷や汗がすさまじいことになっていた。

「……………」

まるで想定していない展開であった。

グレン的にはもうちよつとシリアスな展開を予想して、少しばかり緊張していたのに目の前で繰り広げられているのはどこからどう見てもラブコメだった。

「どういふ人間関係で……?」

「……………複雑なんだ。本当に」

アルスの頭をなでながら、ヒロトが海外ドラマの主人公みたいなセリフを呟いた。

グレンとサンタも惚け顔で頷くしかなかった。

「アルス、おいで。これでは話が進まないだろう」

「はい、はい」

「……………すまない、本題に入ろうか」

アルスがメイの下に戻り、ヒロトが改めてグレンたちと向き合う。

「グレン。君が俺が作ったソウルバーニングガンダムを使っているんだな」

「ああ」

グレンもまたヒロトを真つすぐ見据え、

「……………すまない」

「迷惑をかける」

グレンとヒロトが同時に頭を下げた。

「……………ん?」

「……………あれ?」

「お、なんかデジャブ」

グレンとヒロトは首を傾げ、メイがポツリとつぶやいた。

「えつと……なんでヒロトが謝るんだ？ 俺は、ヒロトのソウルバーニングを勝手に自分のものみたいに使ってるんだからそれを謝りたかつたんだけど」

「いや、あれはレンタル品としてベースに渡したものだから正当な使用だよ。文句なんてない」

むしろ、

「あんな扱いにくい機体をよく使ってくれて感謝しかないよ」

「そんな感じなのか？」

「ああ」

一つ頷き、そして彼はどこか遠い目をして、

「……トライシリーズの実装記念に川崎ベースで開催されたコンテストのために作った  
はいいいけど作りこみすぎて、GBNじゃ動かすのが難しすぎたから……。たまに使用  
状況聞きに行っただけど、半年誰もまとも使えていないってちよつと凹んでたくらいだ。  
だから迷惑をかけるし、むしろ使ってくれていて感謝しているよ」

「へえ……そういうもんなのか？」

「ああ。変な負い目を感じなくてもいい。むしろ、ちよつとテンションが上がったくらいだ」

「うん?」

「俺が置いて言つてたガンプラで君が戦う——ファイターズトライそのまんまみたいだ。グレンのアバターやバトルスタイルも相まってな」

「ああ……それ、タイガーウルフさんやシャフリヤールさんにも言われたよ」

そもそもそれがシアスタルとの戦いのきっかけだ。

熟練のビルダーの残したガンプラを近接専門の赤い男が使うというのはガンダム好きの琴線に触れるものがあるらしい。

メイジンの紹介というのものもあるが、だからこそトップランカーの二人もグレンの相手をしてくれたのだろう。

「ふむ、それでいうとヒロトはイオリ・セイか。いいじゃないか」

「ああ。うん、悪くない」

零れるのは苦笑だ。

その名前はグレンも知っている。というより、最近学んだばかり。ファイターズトライの前作主人公の一人でトライバーニングガンダムを作成した少年。中学生時点で世界最高クラスのビルダーだったという天才児だ。

そのポジションになるというのはヒロトとしても嬉しいのだろう。仕方なさそうだが、しかし口端は確かに緩んでいる。

「それに、この一月のグレンのバトル画像は見たよ。俺の想定以上にソウルバーニングを使ってくれている。今後も、君が使ってくれると嬉しい。なんなら川崎のベースのレインタルを解約して、君に託すよ」

「んん……感謝する、ヒロト」

「よかつたじゃん、グレン。さつくり使うの認めてもらって、ガンπραまで貰っちゃつて」

「ああ……礼を言っても言い切れないな」

「いいさ。使ってくれたほうがソウルバーニングも喜ぶし」

「そんなもんか？ ガンπρα、だよな？」

グレンもバトル中ソウルバーニングに話しかけることはある。だがそれは、ガンπραの心へ語り掛けているよりも自分への鼓舞という意味合いが大きい。

そう言うグレンに、しかしヒロトは柔らかなく微笑み、窓の外を見上げた。

空の先、サーバーに設定された空の、その先の宇宙、銀河の果てまで見ているかのよう  
うに。

「ああ——俺はそう思うよ」

※※※

「ヒロト、リクたちからメッセージだ。もう来るそうだな」

「あ、分かったよメイ」

ホロウインドウからメールを着信したらしいメイの応じて、ヒロトが立ち上がる。

「誰か来るのか？」

「ああ。メイジンから聞いたよ。グレンは勝ちたい相手がいって、そのためにGBNをやってるんだろう？ だったら、強い相手と戦って、経験を積むほうがいいと思って。こつちで知り合いに連絡したんだ」

ヒロトに促され、ログハウスの外に出る。

視線を向けたのは砂丘の方ではなく海側に。

メイのセリフからサンタがどこかそわそわしているのを横目にしつつ、海と空の境界線に目を凝らし、

「——ん？」

「来たな」

水平線の彼方の小さな点は、しかしすぐに近づいてくる。白と空色のガンブラだった。

どこか、グレンに見覚えがあり、すぐに思いだした。

「シアスタルのSSクアンタ……に、似てる？」

「ああ、元々がOOクアンタであれもダブルオーだからな。大本が親戚みたいなものなんだよ。あれは」

「ガンダムダブルオースカイメビウス！」

サンタがその名を叫んだと同時にメビウスが砂浜に着地する。

そしてガンブラの起動状態が解除され、中からダイバーが現れ、

「……んん？」

思わずグレンは目を見開いた。

ガンブラを格納すると中空からダイバーが地面に降り立つ形になる。それはグレン自身も経験したし、他のダイバーがそうなるのも見て来た。

だが、メビウスから降り立ったのは。

「お姫様抱っこ……？」

青年が少女をお姫様抱っこしながら降り立ってきた。

ほんの一瞬の浮遊であるが、そのまま二人が地面に降り立つ。

思わず周りを見るとサンタは面食らっているが、ヒロトとメイは当然のように見ている。

男の方は水色のシンプルな風合いの好青年。少女の方は清楚なワンピースに腕回りの空色のストール。先ほどまで出ていたメビウスとよく似た、というかそのままなカラーリングの少女だった。

「ありがとう、リク」

「うん」

微笑み合いながら少女は地面に立ち、リクと呼ばれた少年は微笑み返す。

そして当然のように二人の手は指を絡め合って結ばれていた。互いの左手薬指には空色の宝石がはめ込まれた指輪が。

二人は足並みを揃えて、こちらに向かってくる。

一緒に手を振ってくるが、グレンは挨拶よりも前に思っていたことがそのまま出てしまった。

「結婚してる?」

「え? してるけど」





「改めて、BUILD DIVERSのリックです、よろしく！」

「私はサラ。よろしくね」

「あ、ああ」

所戻りログハウスの中。

二人人数は増えて賑やかになり、グレンはリックとサラの二人と握手をするがその独特のオーラに圧倒されていた。

リックはなんというか、異常なまでな爽やかな雰囲気がある。好青年を絵にかいたというか、

「圧倒的光……」

隣でサンタが小さく呟くが、まったくその通り。

そしてその隣で微笑むサラはどこか不思議な雰囲気と透明感がある。

その上で二人並ぶとなんだろう。

完成されたというか、ただ並んでるだけで絵になるというか。

結婚していると言われて納得するほどの絵になるカップルだ。

「……GBNでも結婚できるのかあ」

「ああ、この二人が結婚第一号だよ」

二人の雰囲気は圧倒されていたグレンにヒロトが苦笑する。

「半年くらい前に結婚システムが実装されて、リクとサラが最初に結婚したんだ。その時はすごい盛り上がったな。GBNの結婚は二人のダイバーが申請して結婚ミツションをクリアしないといけないんだ。それで専用の合体必殺技とかが使えたりする。演出特化でバトルじゃああんまり使えないけど」

「カザミが上げた密着動画もずいぶんバズったしな」

「あはは……あの時はありがとね」

「あれは楽しかったねえ」

苦笑するリクに、ニコニコとほほ笑むサラだった。

ただの理想的なカップルにしか見えないが、

「BUILD DIVERSのリク。GBNのNo.2のダイバーだよ。この数年不動のチャンプとソロで戦える数少ない人だ。というか、『一人だけ別ゲー』とか呼ばれるチャンプが例外ならほぼ今のGBN環境で最強のダイバーだよ」

「リクよりもそのチャンプが気になるんだが……」

「あはは、あの人は凄いやね。でも、今はそれよりもグレン、君の話だよ」

「あ、ああ」

「勝ちたい相手がいるんだっけ」

「——ああ」

問いかけに、確かに頷く。

その通り。

グレンがGBNを続けているのは、シアスタルに勝利するためだけ。

あの日、グレンの胸の奥底に敗北は焼き付き、その炎は未だ消えることなく彼を焦がしている。

「GBNは楽しい?」

「……どうかな。正直、今はよく分からない」

それがグレンの率直の想いだ。

バトルをしても、ガンプラを組んでも、そこにあるのは執念染みた衝動だ。そこに楽しいという感情は正直ない。

そして楽しもうという想いもまた生まれない。

焼け焦げ燻る敗北だけが今のグレンを突き動かすのだから。

寝ても覚めても彼女のことを考えるのだ。

メイジンは宿命だと言っていたが、そこに込められていたのは憎しみにも近い、決し

て明るくはないものだ。

「ただ、俺はあいつを倒さないと、あいつに認められないとGBNを本当に始めることもできない」

「そっか、わかったよ」

リクもまた確かに頷き、

「それじゃあトレーニングを手伝うよー」

その朗らかな笑みはグレンの暗い感情を一瞬で吹き飛ばす。

あまりの光オーラに圧倒されつつ、

「……いや、それはありがたいけど……その、いいのか？ 俺は初めて会った初心者で、

リクはGBNのトップランカーなんだろう？ なのに……」

「んー？」

彼は何を言われているのか分からないというように首を傾げた。

「——だって、俺もそうだったから」

彼は笑う。

光のように。

世界中の空をギュッと包み込むように。

「俺もGBN初心者で何も知らなかった頃、マギーさんやタイガーウルフさん、シャフリ

さん、ロンメルさん……いろんな先輩に色々なことを教えてもらって、GBNを楽しむことを学んだんだ。だから、今度は俺も、誰かにGBNの楽しさに伝えられたらなって思うんだよ」

「ああ。それにグレン。俺は思うんだ」

リクの言葉を引き継ぐ様に、ヒロトが口を開いた。

「例え今は楽しめなくても、そうでしかないのならそうあるしかない。どうしようもない時は、どうしようもないんだ。そういう風にしかできないんだったら」

ヒロトが両の拳を握り合わせ、目を伏せる。

「それはもう、一人じゃどうしようもない。……だから」

目を上げ、メイとアルスへ視線を移す。

二人に、そしてメイの腕のアクセサリーを目に収め、柔らかく微笑む。

「いつか、その時が来たら周りを見るといい。一人だと辛いけど、誰かと一緒ならきつとどうなっていたって、もう一度……もう一度、やり直すことができるって俺は信じてるから」

一人一人じゃ生きていくのは大変だけれど。

その弱さは誰かと繋がるためにあるのだから。

傷ついても、誰かとの繋がりがあれば何度だって——もう一度立ち上がることが

できる。

「……リク、ヒロト」

「だから、グレンがGBNを楽しめるように俺は手伝うよ！」

「ソウルバーニングを頼む、グレン。見る限り、まだグレンは使っていないシステムもあるしな」

「え？ そうなの!? なにそれ！」

リクの興味がヒロトに向けられ、サラとメイはそんな二人を微笑みと共に見守っている。そしてサンタもまた、隣でグレンを肘で小突く。

リクとヒロト、どちらもGBNでそれぞれの物語があつて、その中で得たものを今グレンに伝えてくれたのだろう。

ああ、それは。

「燃えて来たぜ」

胸の奥が、焼き付いた奥底にさらなる熱量が注がれる。

今のグレンにはGBNを楽しむことも、本当の意味で始めることもできない。

けれど、だからこそ。

彼らの想いを応えるためにグレンは心を燃やすのだ。

## 見据えろ、現実

——ユキハナ・フウカは自分のことが嫌いだった。

それは簡単に言えば思春期のコンプレックスから始まったことだ。

祖母が日本に帰化したロシア人だったためなのかフウカは小学校に上がる前から、成長が早く身長も常にその世代の女子平均身長にプラス10センチはあった。発育も良かったせいも、小学校の高学年に上がった時は高校生、場合によつては大学生や成人に間違われることも珍しくなかった。

小学校の時はそれが原因で男子に揶揄われることも多く、元々気が弱かった為にそれはストレスであり、気弱なせいで言い返すこともできなかった。それ以降は中高一貫の女子高に進学したため、男子からの揶揄されることはなくなったが、そちらの場合自分で言うのもなんだが妙に女子からモテた。

気弱さを隠すために外面を固めたのが悪かったのだろうか。

なるべくはつきりと会話できるようにしていたら妙に冷たくなつたのが、それが逆に良いと周りの女生徒には大うけだった。

よく分からない。

周囲にドMしかいなかったかもしれない。

いわゆるお嬢様学校だったせいか、お姉さまと呼ばれていて色がタノリに付いていなかった。

恵まれていたと思う。

家は裕福で、友達はずっと困ったが慕われていた。

ただ、自分のことが好きになれなくて——きつかけは高校二年の時だった。

休日に、たまたまテレビをつけた。

そしてやっていたのがガンダムビルドファイターズトライの再放送だった。二年前の時点でGBNは既に大きく世界に普及しており、各シリーズも積極的に再放送をしているのだ。

ガンダム、というかアニメ全般を見たことがなくもちろんホビー系統のおもちゃを触ったことはなかった。フウカにとっては娯楽は習い事でやっているバレエくらいのものであった。それもコンクールがあるとプレッシャーだったが。

なにはともあれそれはただの気まぐれであり、暇つぶしだった。

ただ何気なく見ていて、

——そこに、タマキ・フウカの理想の少女がいた。



キジマ・シア。

青みがかかった白銀の髪と可愛らしい小柄な体形。

透明感と幻想さを併せ持った風のような少女。

これだと、思った。

身長も胸も尻もデカイフウカとは対照的な小さくて可愛らしい女の子。

かわいいという概念を極めたキャラクター。

それは電撃的な一目ぼれであり、自分のことが嫌いだったフウカは当然のように彼女に憧れた。

手始めに放送途中だったファイターズトライのそれまでの話を見て、前作も見た。それから自身でガンプラも買い勉強し、ファイターズトライの放送後は過去のガンダム作品の視聴に時間を費やした。特にキジマ・シアとその兄キジマ・ウイルフリッドは〇〇が熱烈に好きというからテレビ版と劇場版を含め何度も繰り返し見て、シアが好きなのを学んでいった。

もちろん受験勉強や習い事はあったが、それは勿論完ぺきにこなしつつ自分の自由を作り出しながらガンプラに没頭していった。

受験に関しては高校の推薦もあったので、ある程度のラインを熟していれば問題はなかったし、それまで優等生だったので貯金していたポイントが良いように働いたのだら

う。

その間、キジマ・シアのように憧れてガンブラ作成以外も色々やった。

わかりやすいところではコスプレなんてのもしたが、コスを用意して来て鏡を見て知ったのは、

『違う……！　シアはこんなに色々大きくない……！』

自分の理想と現実のギャップだった。

無駄に成長した身長と胸と尻は嫌いだったのがさらに加速した。自分の体で唯一嫌いではなかった、胸に反比例して細かったウエストすらもシアの前では大根である。

高校の時から芸能界からモデルやら女優やらいろいろ誘われたが、そんなことをしている場合ではなかった。大学に入れば入ったでミスコンなんかに誘われることになるが当然そんなことをしている場合じゃなかった。

受験を完ぺきにこなした上で、一年半前からフウカが没頭していること。

それは言うまでもなくGBNだ。

現実世界でどれだけシアのように小さくて可愛い女の子になれなくてもGBNの世界でアバターを作ってしまえば関係ない。

ガンブラも時間をかけてOVAアイランドウォーズでシアが使っていたガンダムOシアクアンタ——は、当時までGBNに実装していなかったので、自分なりにO

Oクアンタを改造し、シアがGBNをプレイするとしたらと思いをトレースして改造した自信作であるガンダムOOシアスペシャル。

そうして満を持して、GBNへ。

自信作のガンプラと事前に下調べして設定を決めてい置いたアバターによりダイバーズシアスタル・キジマとして思ったことは、

『違う……！……こんなのシアじゃない……！……それっほいだけの偽物……！』

シンプルに限界があつた。

アバターはともかく全体的な雰囲気、つまりなり切りの問題でシアではないし、そもそもいかに声を再現しようと思つてもまるで違う。

さらに言えば根本的にファイターとしてもビルダーとしてもスキルが足りなさ過ぎた。

キジマ・シアはファイターズトライにおいても作中最高クラスのビルダーであり、同時に極めて強いファイターでもあつた。

鹿児島代表のなんとかっていうモビルアーマーを一人で倒したあの回はフウカ的神回だ。

現実を逃避してGBNに來たのに現実を突きつけられた。

当時はまだファイターズトライ関連要素はなかつたので、半年前に声優ソフトが出る

まではそれっぽいものでしかなかった。

結局半年前までは自分のアバターとガンプラの出来に満足することができなくて別の名前とアバターを使ってスキルの研鑽を積むだけの日々にとどまっていた。

そしてトライシリーズ要素実装の時のフウカの歓喜と言えば今でも言葉にし難い。思わず全身を躍動させてガッツポーズを決めた。

同時にちよつときつかったブラジャーが壊れて凹んだが。

アバターといえ、一度仲良くなりかけた変わったダイバーがいた。

忍者ルックの熟練のSD使いであり、偶然ミッションが一緒になつて会話をすることになったのだが、共通の会話としてアバターの話で最初は意気投合したのだ。

『アバターって理想の自分に近づけたくなるよね。貴女の、本当によくできているわ。リアルアバターそれ?』

『ええ。もちろんそうよ。現実の私を基に作っているわ。ええ。……………貴女のはシアのに近づけているのね。そちらもクオリティが高いわ』

『まだまだ全然よ。まだクオリティは上げられる。……………といいつつ、このアバターはリアルよりも動きやすくていいのは間違いないのだけれどね』

『……………むっ? どういう意味?』

『ああ、ほら、胸とか? 大きいと邪魔じゃないかしら。現実だとガンプラを操縦すること

とはないけれど、バトルの時に邪魔にならない？ そのサイズだと』

『ならない……………ならない、が。……………えっ？ 貴方はもしかして、この私のアバターと同じくらいのサイズなの？』

『ええと……………どうかしら。んー……………それよりもうちよつと無駄に大きいわね。本当、恥ずかしいわ』

『な、なるほど……………ちなみに、ウエストは？』

『えっ？ ウエストは……………そうね、貴女のそのアバターとそう変わらないかしら？ 変な話、といってもそれでもこのアバターよりも少し太いから嫌になるわ』

『少し……………？』

それまで仲良く会話していたと思うのだが、そのあたりから急に距離を取られたのはシヨックだった。

やはり自分はコミュニケーション能力に難があった。

改めて自分が嫌いになった。

胸は成長が止まっていなかった。

大きいサイズのブラジャーについて彼女とも話したかったのだが。

何はともあれ、トライシリーズの実装によりフウカは理想のシアにまた近づけた。

トップランカーとまではいかないが上位ランカーに食い込むようになり、ガンプラスキ

ルは極めて高いもの——正確に言えばOOガンダムに関してはシャフリヤールにさえも届くと信じている。

半年前満を持してアバターと声、スキルと共にほぼオリジナルに近づき、後はバトルやミッションでその存在を周りに広めて自分がキジマ・シアであると認識し、証明する。それがフウカのGBNの楽しみ方だった。

だが——ある程度のクオリティに至り、新たな問題が発生した。

それは、すなわちキジマ・シアを語る上では外すことのできないカミキ・セカイである。

キジマ・シアの魅力はセカイに対する圧倒的ヒロイン力である。

トライでいえばホシノ・フミナという大きなお友達の性癖に直撃したヒロインががいるが、アニメにおいてヒロインだった彼女を登場と共に殴りつけたのがシアだ。

当然のような呼び捨て。相棒であるビルドバーニングの手入れのマンツーマンレッスン。さりげないボディタッチ。

強すぎる女である。

男の手をまともに握ったこともできないフウカには絶対できない所業だった。

その無敵ヒロイン力がシアの魅力の一つ。

すなわち、シアを追求するならばそれも發揮しないとイケない。

だが——GBNにカミキ・セカイはいなかった。

それっぽいものはいたが、まるでクオリティが低かったし、それじゃあ代わりに惚れるような別の男を相手にするかといえれば完全に否だ。

キジマ・シアの相手はカミキ・セカイでなければならぬ。

ユキハナ・フウカはキジマ・シア限界オタクであるのと同時にシアセカ過激派オタクでもあったのだ。

そうして彼女は、フウカは、シアスタルはグレンに出会ったのだ。

正直期待した。

彼のGBNデビューの経緯はまさにカミキ・セカイだったから。

だから彼と戦い——正直期待外れだった。

要素はカミキ・セカイだ。キャラのズレもまあいいだろう。

だが、機体性能に任せた戦い方はただの獣のそれだった。

カミキ・セカイといえれば次元霸王流。次元霸王流といえればカミキ・セカイ。

彼というキャラクターの根幹ともいえるものがなければ、あれはカミキ・セカイっぽい何かだ。

確かに、少し失礼な対応になってしまったのは申し訳ないと後から思ったが。

それでも、まだ足りないのだ。

このGBNで、己がキジマ・シアであると証明するのには、それは信仰にも近い憧憬。

OOにおいて刹那・F・聖詠がガンダムを神聖視していたように。

彼がガンダムを紛争根絶、世界の歪みを正す象徴としたように。

フウカ——シアスタルもそれに近いものを持っている。

キジマ・シアは『可愛い』が具現化した存在だ。

世界、否宇宙共通の無敵概念。

可愛いによる紛争根絶すら可能レベル。

来るべき対話もこれで乗り切れる。

つまり——キジマ・シアもガンダムだ。

※※※

「いふいふ……」

「くくく……」



どこかのフォースネスト、そのどこかの書齋。

ライトのほとんどを落とし、小さなランプを囲み二人の男が向かい合っていた。

片や三代目メイジン。サングラスに揺らめく炎が反射する。

対するは金髪の仮面の男だった。ワインレッドの着物を模したような衣装に、顔の上半分を覆う仮面。

どちらも、互いの口元は歪んでいた。

「協力感謝する、チャ——」

「おっと。私はAVALONのリーダーのチャンピオンとは関係ない。ただのトライエイジ大好き仮面と呼んでくれ」

「……長くないか？」

「ふむ……ではトライエイジ仮面と」

「なるほど！ ではトライエイジ仮面、協力感謝する！」

「なに、造作もない」

二人の仮面の男の間に出現したホロウインドウ。

それはフォーストーナメントの詳細発表だ。

『メイジン主催・誰がなんと言おうと！ 俺が！ 俺こそが○○だ大会！』

その名に突っ込む者はこの場には誰もいない。

「元々この手の原作キャラロールダイバーのみのトーナメントバトルはやってみたくも思っていた。それをメイジンが主催してくれるというなら、私の個人的采配で運営に掛け合い、方々に協力を求めることも是非は無し」

「ふっ……流石はトライエイジ仮面。話が分かる」

「くくく……トーナメント参加者にはすでに招待を？」

「ああ。私がいりすぎった16人には招待メールを送った。おそらく全員受け入れてくれるだろう。——あの二人もね」

「例の、か」

トライエイジ仮面は何か思い出すように手を顎に当てる。

「確かトライエイジ仮面……いや、チャンプが稽古を付けたと聞く」

「ああ。チャンプもヒロトとリク君の紹介では無碍にできなくてね」

「ははは、流石はリク君とサラ君の結婚ミツションでラスボスに割り込んだチャンプは一味違うね」

結婚ミツションは歴代ガンダムの中のカップリングが成立している主人公機体をヒロインのカラーリングに染まったガンプラ3機と戦うというものだったが、リクとサラの場合、その三機目にわざわざ神父風にガンプラを改造したチャンピオンが立ちはだかったのだ。ちなみにそれは公式でリクが一人でチャンプに勝利した唯一のバトルで

ある。

数多のGBNタイトルと二つ名を持つチャンプだが、そこに『リクサラ正面当て馬面』が追加された。

そんな彼がグレンと一度戦い思ったことは、

「素晴らしいセンスだな。かつてのリク君を思い出す。ヒロトの機体を使っていると  
えば初期のリク君以上やもしれん。……まだまだ未熟なところはあるがな」

「君に……チャンプに言わせれば誰もがそうだろう」

「だが、確かな熱を感じた。彼は素晴らしいダイバーとなる素質を持っているよ」

「ふっ……ああ、そうだ。彼は素晴らしいダイバーとなる素質を持っている——だが、だからこそ、彼はまだ本当の意味でGBNを始めていない」

それはグレン自身感じている歪みであり、メイジンもまたそれを感じていた。

だから、

「この格好の舞台を用意したわけか。ずいぶんと気に入っているね」

「なに、この身は三代目メイジン・カワグチ！ GBN初心者を導くのが私の役目というものだ！」

「——本当は見たいだけだろうか？ アニメではなかった、カミキ・セカイ対キジマ・シアのガンプラバトルを」

「否定はしないっ！」

「くくく……私も」

「ふふふ……」

暗い部屋に、羽目を外して趣味に没頭する子供みたいな大人の笑い声が響いていた。

※※※

「あれ、隊長って今日休みじゃなかったけ？　なんか隊長室立ち入り禁止になってるけど」

「さあ？　何やらメイジン・カワグチが訪れていたので、歓談しているのではないでしょうか」

## 叫べ、魂

通常、観客はいないフリーバトルエリアであるコロシウムに観客席が開放される。

天蓋も取り払われ、青空の下に数千人が一度に集いそのトーナメントを見物に訪れていた。

『メイジン主催・誰がなんと言おうと！ 俺が！ 俺こそが○○だ大会！』

1プレイヤーが主催しているトーナメントであるが、いかなる手法か運営からも一時的にコロシウムの機能が開放され、大規模大会として成立していた。

それはトライエイジ仮面が運営に掛け合いイベントなっているということもあるが、同時に三代目メイジンというGBNダイバーの影響力と注目度も表している。ファイターズシリーズにおいて圧倒的な存在感を放ち、人気を博した男のなり切りダイバーはしかし、多くのGBNダイバーからなり切りとして認識されていなかった。

キャラクター、バトル・ビルドスキル、発言、言動、精神性。

その全てが、彼がメイジン・カワグチであるということをも多くのダイバーに見せつけ、認めさせていた。

原作キャラクタープレイ、なりきりダイバーというのはGBN内において一定数いる

が、しかしメイジンほどの存在感を持つダイバーは外にはいない。

そんな彼が自ら選んだなりきりダイバー16人。

GBNダイバーは大半が少なからずガンダムオタクであるので、アニメで見たキャラが実際にGBN内とはいえ生きて動くという様を見たくないわけがなかったのだ。

1対1のトーナメントバトル。

フィールドはランダム。効果無しから宇宙、資源衛星軍、コロニー、高知、森等々、コロシウムで設定可能なものから自動で選択。

ただし、観客席から見えるフィールドとコロシウムは別のデイメンションとして区切られており、戦闘時の位置や状況に応じてズームやリアルタイム切り取りをするように調整されている。

その中で、我こそは原作キャラの化身であると信じるダイバーが己を証明しあう。そして、その16人の中にはグレンが、シアスタルが参加しており――。

※※※

「——で、例のカミキ・セカイとキジマ・シアの子が決勝かあ」

ポップコーンを齧りながらBUILD ダイバーズのモモは対戦表を見つめていた。

コロシアムの観戦席、すり鉢状になった中央は現在空っぽだ。

開催して数時間、準決勝までの全ての試合は終了し、インターバル。これから十分後程に決勝戦が始まる。

「バトルのレベルは決して低くなかったけど、その二人が突出していたのは否めないね。特にガンプラの出来は段違いだ」

ホロウインドウでこれまでの対戦表と試合映像を切り取った画像を見ながら、眼鏡をコウイチが押し上げる。

ビルドダイバーズのガンプラ製作を監修する彼からすると、グレンとシアスタルのガンプラは興味をそそられるらしかった。先ほどから色々な角度から二人のガンプラを見つめ、推し量っている。

「リクくんとあとヒロトが直前に稽古つけたんだっけ。それなら納得だねえ」

「……………あの子、まさか……………いや……………でもあのレベルのロールプレイなんて……………」

ジューズを飲むユツキーはのんきに、隣のコウイチのウィンドウを除き、アヤメは何故か口端を引きつらせていた。

何か覚えがあるらしいのだが、話しかけても唸っていて反応が返ってこない。

昔の知り合いなのかなとモモは適当に想像する。フォース結成して3年半だが、GN歴はアヤメが一番長いいし、学年や学校といったリアルの都合で彼女が一人でミツションを行うこともそれなりにあった。その中で友人ができていてもおかしくない。

キャラメル味のポップコーンを噛みしめ、GNの味覚再現エンジンのクオリティの高さに関心——することもなく、美味しいなあと思いつながら頭上、一般の観客席ではないボックスの観客席に視線を移す。

「リック君とサラちゃんはVIP席か。いいなあー」

「グレンの師匠梓つてことでメイジンが招待してくれたみたいだね。ヒロトとメイもそっちに行ってるらしいよ？」

「はー、なるほどねえ」

一般の観客席が嫌というわけではないが、それでも自分たちがいることで若干の騒ぎになるのは否めない。

フォースBUILD DIVERS。

3年半前の二回の有志連合戦で名をあげ、1年半前のエルドラミツションでも最前線で戦った。その後のも難易度の高いミツションをクリアし、フォースリーダーがGNナンバー2であるリック、それに彼とサラがGN初の結婚システム利用者ということもあつて注目度は非情に高い。



だから、大会が始まって席に座っただけで知らないダイバーに色々話しかけられた。モモはまるで気にならないのだが、ユツキーはともかく人付き合いが上手と言えない。コーイチとアヤメは未だに戸惑っていたのがちよつと面白かった。

「コーイチさんはどつちが勝つと思う？」

「ふむ」

問われ、コーイチが再び眼鏡を押し上げた。

いわゆる眼鏡クイ。

ひそかにモモが軍師ムーブと呼んでいるもの。おそらくあれをやることで瞬間的に知能指数を上げている。何回かモモも試したがそんな気がした。

作戦立案は結局コーイチの仕事なのであまり意味もなかったが。

「ガンプラの出来でいえば……互角だけど、グレンのはヒロトが作ったものだから理解度という意味ではシアスタルが勝つだろうね。操縦スキルでもシアスタルが上だ。これは純粋な経験値によるものだろう」

「じゃー、シアスタルちゃんの勝ち？」

「どうかしら」

アヤメが口をはさんだ。

彼女もまたウインドウを展開し、コーイチがフォースの共有フォルダに保管した大会

戦闘画像を展開する。

これまでの3回のバトル。

一回戦、サカイ・ミナトロール、ミスターMSと使用ガンブラ『はいばーふみな・まりん』。

ファイターズトライのヒロイン、ホシノ・フミナをそのままガンブラにしてさらに水着を着せた変態ガンブラである。それでお色気による油断させるといっても戦法を取ったが、グレンが構わずにライトニングストライダーで蹴り倒した。

馬鹿だなあと、モモは思った。

二回戦、三部仕様フリット・アスノロール、フリッターと使用ガンブラはガンダムAGEー1 フルグランサを改修した『ガンダムAGEー1・エクスターミネイト』。元々の機体にさらにミサイルポッドやビーム兵器を盛りまくり、フィールドであったデブリ群のデブリを残らず消滅させるほどの殲滅ぶりを見せつけたが、ウイニングスターの防御力を遺憾なく發揮し近接に持ち込むことで勝利。

余談だが、『特に理由はないが殲滅殲滅ウー!』とひたすら叫ぶ危険思想の持主だった。キャラロールの方向性が間違っていない? とモモは首を傾げた。

三回戦、東方不敗ロール、西方無敗と使用ガンブラは改造無しの『マスターガンダム』。まさかの素組み機体での正面からの殴り合い。

色物続きだったところに面白成分抜きのパトルであり、正面からの殴り合いだったが——それでもソウルバーニングガンダムの拳が打ち勝った。

超級霸王電影弾を生で見れた時点でモモは満足した。

「二回戦は置いておいて、二回戦、特に三回戦の相手は確かな強さの持主だったわ。それらを正面から打ち勝ったということは彼は確かな実力がある。シアスタルのガンブラと経験値をも上回ることはなくもない」

「彼はまだGBNを始めて二か月と経っていないらしいよ?」

「それを私たちが言うのかしら?」

「……違う」

アヤメの問いかけにコーイチが苦笑した。

時に経験を上回るセンスというものは存在する。

彼らのリーダー、ミカミ・リクが最たるもの。

リクの場合、GBN初日からその戦闘技術には光るものがあつたのだから。

そのリクがトレーニングを施し、コーイチに匹敵、ある分野では勝てないと認めるヒロトが作成したガンブラをグレンは使っているのだ。

そりゃ絶対強いわなど、モモは思った。

そしてそれ以上に、

「リク君が鍛えたんだから、負けちゃダメだよー！」

※※※

「———こんなものかしら」

格納庫で一人、ウインドウから自身の機体の最終調整をしつつシアスタルは首を傾げた。

と言っても、GBN内からログイン時にスキャンしたガンプラ以上の何かを生み出せるわけではない。武装の切り替えや内蔵されたシステムのオンオフ、使用制限を弄る程に過ぎない。

これはシアスタルなりの精神統一だ。

機体は完璧だ。

これまでの三つの闘いでシアスタルは危うげなく完勝している。

この大会のためにチューンアップしたSSクアンタは想像以上の性能を発揮してお

り、大会におけるガンプラでも最高峰の完成度を誇っているあたり、キジマ・シアの面目躍如と言えるだろう。

その上で、

「勝たない」と

この大会で勝利しなければ意味がない。

三代目メイジン・カワグチが主催した今回の大会の注目度は非情に高い。

運営の後押しもあり、どう見てもチャンプなトライエイジ仮面がいて、多くのトップフォースが観戦に来ているのも確認する。

個人的な尊敬するメイジンとシャフリヤールがいるのが非常に大きい。

それらの前で己がキジマ・シアであると証明すること。

シアスタルにとってそれこそが積年の願いでもあるのであり、GBNでバトルを行う理由なのだから。

それに、

「——まさか、彼が決勝とはね。今度は、ちゃんとセカイになってくれているかしら」

対戦相手、カミキ・セカイロールの青年。

これもまた本来であればシアスタルが待ち望んだ相手であるが、以前の闘いは失望の

一言だった。あれから、どう変わっているのか。彼がカミキ・セカイでいてくれているのか。

少しだけ、期待している自分がある。

強くあつてほしい。

それは心から願う。

シアスタルにとつて強くないカミキ・セカイに意味はない。

「……そう思うと、勝つても負けても悪くないのかしら？」

勝てば己をキジマ・シアとして証明できる。

負ければ相手がカミキ・セカイという証明であり、シアスタルにとつて宿命の相手が見つかり、キジマ・シアロールはより完璧なものに近づける。

分析すれば、どつちに転んでもシアスタルの得になる。

そう考えて——苦笑する。

「ふっ——シアなら負けることなんて考えない。必ず勝つと、静かに決めるだけよ」

故に心を決める。

キジマ・シアはダイバーではなくビルドファイターだ。

多くの可能性を持つGBNにおいて、戦うためにダイブしている。

GBNという世界に飛び込んでいるのではなく、ガンプラバトルという戦いに飛び込

むのだ。

「期待しているわよ」

小さく呟き——ウインドウを操作する。

これまで制限をかけていた機能をアンロック。

元々決勝でしか使う気がなかったシアスタルの奥の手。

ウインドウを消して、作り上げたガンプラに乗り込む。

「行きましょう、クアンタ」

——来るべき証明を超えるために。

※※※

「準備はいいかい、グレン」

「おう」

格納庫でストレッチを終えたグレンはサンタに応え頷いた。

GBNという電子空間においてストレッチの意味はないが、気分の問題だ。その方が

勢いが付く。

体は好調、機体は万全——心は、燃えている。

「誘った甲斐があつたよ」

そんなグレンを見て、サンタは笑う。

「こんなに君が燃えてくれるとは思ってなかったな」

「……そういう意味じゃ、悪かつたなサンタ」

少しだけ、申し訳なく思う。

この一月半、グレンはGBNを続けて——辞めていないが、それはサンタと楽しんでいるとは言い難い。

多くのダイバーに助けを借りているが本質的に見ているのは一人だけだから。

一緒に遊ぼうと誘ってくれた幼馴染に応えているわけじゃないのだ。

だが、サンタは一瞬目を丸くした後、

「あはは、いいだよグレン。そんなの。そりゃあ一緒にバトルできればいいとは思ったけど、それ以上に燃えているグレンを見るのは結構楽しいんだよ」

「そんなもんか？」

「ああ。……ま、それならこのバトルがどうなつても、GBN続けてくれると嬉しいかな」



「……本当にGBNが好きなんだな」  
「もちろん」

胸を張って言い切るサンタに思わず苦笑する。

何かをそんな風に好きと言えるのは素敵なことだ。

そして、グレンはまだそういう風には言えない。

言えるかどうかは、全てこの後の戦いに掛かっている。

「……よし、行つてくるぜ」

「ああ、行つてこい」

背中を押されて、ソウルバーニングガンダムに乗り込み、操縦桿を握りしめる。

『準備はいいかね、グレン君？』

「ああ」

すぐにウインドウが開き、メイジンの顔が映る。

彼の顔は、好きなおもちやを前にした子供のように笑っていた。

自分は今、どんな顔をしているのかなとふと思う。

『——ふつ、燃えているね』

告げられ——考えるまでもなかった。

「当然……！」

口端が吊り上がる。

自然を歯をむき出しにして笑う。

この瞬間だけを望んでいた。

そのためだけにこれまでの日々があり、出会いがあつた。

燃えている。

燃えている。

熱く——燃えている。

『それでは——良いバトルを』

一言残し、ウインドウが閉じる。

同時正面メインウインドウに出撃許可のシステムメッセージ。

ここからはもう、全てが介入する余地がない。

あるのは自分とシアスタル。己と相手のガンプラだけ。

一度、長く息を吐き、

「——グレン！ ソウルバーニングガンダム！」

※※※

「シアスタル・キジマ。SSクアンタ・プリマ・アソルータ」

※※※

「行くぜエエツツツ!!」

「——目標を駆逐する」

## 踊れよ、舞姫

無機質なフィールドに光が走り——荒野へと変換される。

戦闘フィールドとしては地形効果がなく広いだけ、ただし空は成層圏まで続いている。

障害物や高低差もない故に策を生じえず、ガンプラの出来と操縦スキルが物を言う。そういうステージだ。

そしてそれだけではなく。

ファイターズトライにおけるガンプラ全国大会で、主人公のビルドダイバーズ対キジマ・ウイルフリッド率いるチームソレスタルスファイア。

決勝戦が時間制限を迎えた後の延長戦のバトルステージになった場所だ。

グレンとシアスタルの決戦の地としてはこれ以上ふさわしいものはない。

「つおおおおおおおおおおおお!!」

「ッ———!」

その中央、ゲートから飛び出すと共に紅蓮と翡翠が激突する。

「ずっと、この瞬間を待っていたぜ……ッ。シアスタル!」

歯をむき出しにしてグレンは笑う。

言葉通り。ただ彼女と再び相對するためだけにこの二か月はあったのだから。

空中の激突の後に地面に着地し、拳を構える。

焦がれた相手を見据え——そして、目を奪われた。

「んん——っ」

シアスタルのガンブラ。

SSクアンタ・プリマ・アソルータ

SSクアンタをさらに改修したものなのだろう、基本的な造形はSSクアンタであり、右肩のGNバインダーに加えて左肩にはGNフルセイバーを模したプリマセイバー追加されている。

元々SSクアンタは00クアンタをキジマ・シアが改造したガンダム00シアクアンタをシアスタルがGN仕様に変化したもの。

そして00クアンタにはいくつかのバリエーションが存在する。

00クアンタフルセイバー。

それがプリマの基になった機体だ。

00クアンタのツインドライブを安定させるためにGNフルセイバーを装備。劇場版では使用されずゲーム等のみで出演する機体であり、機体デザイナーの設定では限定

的な条件下ではあるもの一週間で作中地球に襲撃した地球外生命体ELSを殲滅する  
うという戦闘力を誇る。

対話のためではなく、戦うためのガンダム。

シアスタルはこの戦闘特化機体を素案にしつつ、しかしただのアップデートバージョンとはしなかった。

プリマはSSクアンタに比べて各部のクリアパーツ、GNコンデンサーが関節部だけではなくレンズ状ではない長方形のそれが両足の脛や上腕部、腰回りに増設されている。

GNフルセイバーは本来機体背部にマウントされるが、プリマセイバーは右肩にジョイントパーツを増設し翼に近い左右対称のシルエットに。

太陽の光に照らされて、全身のクリアパーツがエメラルドグリーンに輝く。

太陽炉を備えた機体は太陽光をドレスのように纏う。

ガンダム00における最高級の戦闘力を兼ね備えながら、グレンが思わず呼吸が止まるほどの美しさを持つガンプラだった。

SSクアンタ<sup>プリマ・アソルータ</sup>至上の舞姫。

シアスタルの持つガンプラ製作技術。ガンダム00シアクアンタとそのオリジナルである00クアンタを始めとした太陽炉搭載機体へのみ特化した彼女のビルドスキルの集大成ともいえる。

※※※

「素晴らしい。言葉が無いな」

隣に座ったシャフリヤールが嘆息したのを聞き、タイガーウルフは少なからず驚いた。

タイガーウルフとシャフリヤールの付き合いは長い、その上で腐れ縁とでもいうべき相手。

ライバルとさえも言っていない。

決して口にする気はないが。

同時にそのガンプラビルドの技術は誰よりも認めていると言っているし、名実共に彼の技術はGBNにおける最高位。その鑑定眼もまた認めている。

その上で、彼が純粹な称賛のみを口にするのはめつたにないことだ。

「……そんなにか？ そりゃあ確かによくできたガンプラだが」

プリマから目を離さなかったシャフリヤールが一瞬視線をウルフに向けた。

道端の石ころを見るような目だった。

「犬。君は本当に何も見てないな」

「んだこら狐野郎てめえ！」

「分からないのか！ あのガンプラに込められた——愛がッ！」

琥珀の瞳が見開かれる。

「なんとという……なんとという愛……！ 今私はらしくもなく羨望、嫉妬すらしている！

一つのガンプラに、あそこまでの愛を込められるとは……！」

「ええ……」

あまりの勢いに思わずタイガーウルフは仰け反った。

愛に関しては口うるさい、一家言ある男ではあるがここまで盛り上がることはそうそうない。

「お前さんがそこまで言うたあな。しかも、GNドライブ乗つけてるやつで」

シャフリヤールの愛機、セラヴィーガンダムシエヘラザードはプリマと同じでガンダム00に登場する太陽炉搭載機体セラヴィーガンダムを基にヴァーチェやプロレマイオスの要素を足して作られたGBNにおける最高傑作の一つ。

彼は他人のガンプラを何よりも込められた愛で判断する。

愛がなければ論外。



愛があれば、その上で長所を褒めて、それから短所を指摘するというよりも彼から見た改善点を伝えることで製作者の成長を促す。

ビルダーの頑張りや愛を認め、その上で次へと導く。

教え方が理論的でわかりやすく、上手いのだ。

その点も感覚派のタイガーウルフにはできないやり方ではある。

だからこそ、シャフリヤールが無条件で褒めるといえるのは極めて珍しい。

彼がべた褒めする太陽炉搭載機体はタイガーウルフが知る限りリクのダブルオーダイバーメビウスくらいだ。GNドライブのくくりを抜いても片手が余るくらいだ。

「この大会はなりきりダイバーによる大会だが、しかしガンダムのカヤラに影響を受けているダイバーは多い。私自身、ティエリア・アーデから多くのインスピレーションを受けている」

「ああ。万死に値する！ だよな。あれお前が言いだしてからOO見るとお前の面が過るんだけどどーしてくれんだ」

「だが、彼女の場合はキジマ・シアになりきり、キジマ・シアがGBNにいたら、ガン普拉をどうするか。ただなり切るわけではなく、その先まで思考をトレースし、技術を重ね、あのガン普拉を作成した」

故に、

「これを愛と言わずに何と言う……!」

ガンプラは愛で作るものと、シャフリヤールは口にする。

そしてそれをタイガーウルフも認めていること。GBNにおけるガンプラの強さは機体の設定ではなく、ガンダム作りこみであり、ビルダーの好きで決定される。モモのモモカプルがいい例だろう。

あれはビルダーのセオリーから見れば滅茶苦茶だが、モモの思う可愛いをGBNを読み取ってやたら高性能な機体に出来上がっているのだから。

正直タイガーウルフには分からない可愛さだが。

そこにあるモモの好きは伝わってくる。

リクのサラカラーのメビウスもわかりやすいだろう。

一部では嫁ガンダムと言われる機体だ。

そのせいで一時期推しキャラのカラーリングをするガンプラが非常に流行ったこともある。

「素晴らしい。私は彼女に掛け値なしの賞賛を送ろう。——おそらく00系列のガンプラの扱いに関してだけ言えば、彼女のスキルは私をもう凌駕するだろう」

「マジかよ」

「ふふふ……これが愛」

ううむと、唸りタイガーウルフがプリマへ視線を送り、シャフリヤールもまた目を細める。

見やる先はプリマ——その増設されたクリアパーツ。

「あれは——ふふふ、全く。驚嘆に値する」

※※※

空中を赤と緑が交差する。

飛行による高速戦闘はG B N、ガンプラバトルにおける花形の一つだ。

プリマの主要武装は刹那・F・聖詠の乗るガンダムの流れを汲んだセブンスソード。

左腕の折り畳み可能なGNソード改。右肩のGNバインダーは三つのソードビットで構築され、プリマセイバーはGNソードIVをGNガンブレイド二つを結合することで七つの剣を実装させている。

大型剣二本とビットが五つの構成だが、それぞれは合一機構は取り込まれておりライフルモードも使用可能だ。

そして、ソウルバーニングの拳とGNソードをぶつけ合いつつ、シアスタルは思う。

「腕を上げたわね」

内心素直に関心し、唇を舐める。

『んん……！ そりゃ嬉しいなア！』

数度の激突でシアスタルはグレンの操縦スキルの上達を認めざるを得ない。

前回の闘いは機体を動かしているが、ガンプラバトルのそれではなかった。動きそのものは卓越していたが獣のものであり、空中機動などは見られたものではなかった。

だが、今回は違う。

ソウルバーニングガンダムのプロフスキー粒子スラスターを扱いきり、自在に空を飛ぶ。

いいや、彼の場合空を飛ぶというよりも、

「ふっ……！」

GNソードを叩き込み、それがソウルバーニングの拳とぶつかり、弾かれ合う。

互いが距離を取り、ソウルバーニングはスラスターを吹かせ——中空を踏みしめた。

「粒子変容機能！」

ソウルバーニングの動力炉——そして、SSクアンタ・プリマもまた、プロフスキー

「粒子により動くガンプラだ。

プリマのGNドライブも、あくまでもプラフスキー粒子がGN粒子に変容して動いているというものだ。

そして、ビルドファイターズの一部のガンプラにはプラフスキー粒子に干渉・変容させることで攻撃を曲げ、飛ばし、そして足場に行きわたることができる。

それを以てソウルバーニングはプラフスキー粒子を足場として空中ジャンプを可能としていた。

「レインボービットー」

両肩のGNバインダーとプリマセイバーがそれぞれ分離。GNソードⅣのみを残してソウルバーニングへと殺到する。五つのビットから粒子ビームが放たれるが、ソウルバーニングは止まらない。

空中跳躍とスラストターの加速を繰り返して行われる鋭角疾走。

チャンピオンにも認められ、リクとのトレーニングで研ぎ澄まされたバトルセンスが粒子ビームの檻を駆け抜けさせる。

『――！』

再度、GNソードと拳が激突しプラフスキー粒子の光が二機を中心に弾け煌めく。

「――認めるわ、グレン。貴方は弱くない」

残っていたGNソードIVを右手に握り、二刀流にてソウルバーニングを迎撃する。

二本の剣と四つの手足がぶつかり合う。

「その上で見せてもらいましようか、貴方がカミキ・セカイに相応しいのかを！」  
拳と剣がしのぎを削り、ソウルバーニングとSSクアントのツインアイの輝きを交わ  
る。

そしてシアスタルもまたグレンを見定める。

セカイとシアの宿命をなぞることができるのか。

それがシアスタルが彼と戦うための理由の一つで、

『よ』

「ん？」

『れよ』

オーブンチャンネルから声が小さい。

何かを言っているかよく聞こえず、

『もつと！ 熱くなれよおおおおおおおおおおお!!』

「きゃっしゅ！」

急に聞こえて来た爆発するような咆哮に思わずシアらしくない声を上げてしまった。だが、グレンは構わず、ソウルバーニングの赤いツインアイは燃えるように輝いている。

『温い温い温い！ どうしてそこで諦めてるんだ！ そんなことはどうでもいい！ セカイもシアも知ったことじゃあない！ 俺はそんなことのためにここにいるんじゃない！』

「き、企画の全否定！」

『シアスタル！』

グレンが叫ぶ。

炎のように。

『俺はただ、お前を倒すためにここにいる！ そのためだけにGBNに残っている！』

「なっ——」

『お前に負けて、温いと言われ——お前とそのガンプラに魅入られた』

一月半前のこと。

シアは彼という男を温いと、偽物と断じ切り捨てた。

『だから、俺が望むのはお前と俺の決闘だ！ そこにシアとセカイは関係ない！ それ以外の何物も必要ない！ ——ああ、そう！』

叫びの途中、急にグレンは何かを思いついたかのように言葉を区切った。  
そして、

『この気持ち——まさしく愛だ！』

「愛……!?!」



## 高まれ、心

「うおおおおおおおおおおおおおお!! 愛! 愛って言いました! 告白じゃないですか? 告白ですよね? 告白ですよこれ!!」

「いや、落ち着けよパル。告白というか——」グラハム語録だろ」



「つ——な、なるほど」

グレンから飛び出してきた愛という言葉に一瞬頬を赤くしたシアはしかし、すぐに冷静さを取り戻した。

グレンの言葉は確かに聞きようによっては愛の告白にも聞こえるだろう。

中高時代、現実でやたら女生徒からの告白を受け、さらには態々別の学校から告白しに来るような男子からも愛の言葉を浴びせられたがここまで直接的なものは初めてだ。

だが、これは愛の言葉ではない。

「グラハム・エーカーの代名詞的セリフの一つ——見て来たというのね、00を!」

グレンが叫んだ言葉は機動戦士ガンダム00の主人公、刹那・F・セイエイのライバル、フラッグファイターグラハム・エーカーのもの。作中刹那と何度も戦いを繰り広げ、彼に固執し、在り方を歪め、歪められてしまった武士道の男。

特徴的セリフ回しと声優の好演から人気の高いキャラクターだ。

その言葉を使つたということはグレンは00を視聴してきたのだろう。

あれから二か月ほどあったのだ、アニメ二期分と劇場版を見るのには十分に余りある。

シアスタルにとつてはガンダムビルドファイターズトライは聖典だが、それを除けば一番繰り返し返して見たのは00シリーズだ。

もつともそれもキジマ兄弟が00が熱烈好きだからというのが理由なのだけだ。

『あ、いや別にアニメ見たわけじゃねーよ』

「……は？　ならなんで今のセリフを」

『チャンプとトレーニングした後には、シアスタルと戦う時はこれを使うといいっていい笑顔でグラハム語録とかいうテキストデータをくれた』

「チャンプ……!」

VIP席、苦笑するリクとかつての上司のハメの外し振りに頭を抱えたヒロトがトライエイジ仮面を見た。

「ふっ……困ったチャンプがいたものだね！」

「全く……でも、トライくらいは見たんでしょうね！」

『ああ！ ちゃんと調べたぜ！』

「………んん？ 調べ、た？」

日本語が不自由なのかこの男は。

アニメを見ることを調べたなんて、言うはずもなく。

「——まさ、か」

『ああ——ちゃんと全部ガンダムwikiで調べたぜ！』

「い、いっつ——！」

思わず無造作にソードビットやガンブレイドから粒子ビームを乱雑にぶち込んでいた。

いらだちを込めたものだったから当然ソウルバーニングには当たらず、簡単な空中機動で回避される。

「なんてもつたいないことをしてるあなたは！ 見た後に情報補完のために見るならばともかく、見る前から先に調べるなんて！ そんなことをするよりも貴方はそのソウルバーニングガンダムの基である、ファイターズやオルフェンズを見る——」

言葉にして、ふと気づいた。

ガンダムマニア、ガノタとしてあつてはならない可能性を。

「ま、まさか貴方……！」

『ああ！ やっぱりそこらへん全部wikiで調べたぜ！』

問答無用で怒りの粒子ビームを叩き込む。

さつきから同じセリフしか聞いていない。

しかして、原作を見ずにwikiで情報だけ文字で読んで見た気になるなんて言語道断である。

ウインドウに表示した観客席からもブーイングが上がっていたが、それも当然だろ

う。

GBNは全員がというわけではないが概ねガンダム好きの集まりなのだから。

そんな風に見える者に対して、良い感情は出てこない。

見てないのはともかく、調べるだけで見た気になるのは問題だ。

『ええい、仕方ねえだろ！ だつてよ——多いんだよ！ アニメ！ いくつある

んだ！』

「くっ……！」

思わずビット制御が乱れ、観客席のブーイングも止まった。

『そりゃちよつと見ようとは思つたし、ヒロトやリクにも齧りだけ聞いたからおすすめ見ようと思つたらやたら出てくるし、そもそも配信サイトに登録して課金するかレンタルするかしないと見れないし、やたら話数が多い！』

「それでも2, 3日潰せば見れたでしょう」

『そんな時間作るくらいならログインしてバトルする』

「この……っ」

グレンの言葉に思わず歯噛みするが、彼の言葉もある意味正しい。

そもガンダムシリーズの始まりは約40年以上前のこと。そこから多くのアニメメインシリーズを生み出し、ゲーム漫画小説資料集ムック本等々すべてを網羅するには

膨大な時間と金銭が必要になる。

決してアニメを見始めて二か月の少年がカバーしきれぬものではないのだ。

シアスタルでもそれこそ数年かけているが、いまだにその全てを抑えているとは言えないのが正直なところ。

『まあ俺はガンプが好きで続けてないってのはさつき言っただろう。熱量はそこにぶち込んだんだ！ なあに、シアスタルが言ったようにファイターズとトライとオルフェンズ、ダブルオーはざっくりとだがさらっといたぜ！ 機体設定は特にな！』

「ああ……ううん、まあ最初なら仕方ないかしら……」

『オルフェンズはなんかSNSで一時期噂になったしな！ 『止まらねえ』ってやつだろ。団長が死ぬのは知ってる。なんかやたら死ぬのも』

「確かにあれは話題になったけど……このっ……なんていうか……そういう感じで見ると奴じゃない……！」

『まあ個人的に金髪の水着みたいなツインテの子が生きてれば俺は問題ない。乳はデカければデカいほどいいしな』

「あつ」

『ん？』

「……な、なんでもないわ」

『そうか』

ははは、とグレンは笑い。

『——いや絶対それ死ぬ奴だろ!!! いい感じに戦死するんだなあの子!』

何も言えず、ソードビットをGNソードに合一させて、GNバスターライフルによるビームを叩き込んだ。

それをぎりぎりですぐグレンは回避しつつ、

『この野郎……! いいさ——今の俺は、アスランすら凌駕する存在だ!』

「アスランを超えてどうするのかしら!？」



「ぬう……! あれは『みんな知ってるけど実は重大なネタバレだったの問題』と『オタクっぽい匂わせぶりの発言でネタバレしてしまう問題』!」

「知っているのお!?! ロン電ちゃん!」

「ああ……!」

ロンメルはグレンとシアスタルの会話に思わず声を上げた。

マギーの声に頷きつつ、

「現代社会はインターネットは世界中に普及し、情報という概念はもはや地理的な距離を意味をなさない。実際GBNから世界中の人間がログインし日々交流することが可能だ」

「壮大な始まりねっ！」

「アニメ一つをとつてもSNSやGtubeで実況や感想をアップすれば家にいながら多くの同好の士とコミュニケーションを取ることが可能だ。盛り上がりが大きければトレンドに乗ることもある」

だが、それ故に、

「重大なネタバレが盛り上がった故にトレンドに乗り——関係ない人の目に留まつて、盛り上がり故にそれを知ってしまうわけだな」

「ああ……」

マギーにも覚えがあった。

先ほどグレンが口にした団長——オルガ・イツカの件もそうだ。

彼の死に様は物語上衝撃的な展開であり、視聴者にもショックを与えたが同時に非常にSNS、ネットで盛り上がった。

だから、オルフェンズ未視聴者でもその存在を知っているくらいに。

ああ、あの死んでも止まらねえからよの人だよね、という具合に。



ガンダム以外でも似たようなことはある。

赤いアーチャーの正体はエミヤだとか。

ダース・ベイダーはルークの父親だとか。

宝生永夢は世界で初めてのバグスターウィルス感染者だとか。

そういう本来は絶大なネタバレなのに、皆知っている類。

マギーにしても自分の店に鉄血ネタのものを飾っているので頷くしかなかった。

「じゃあ、あの子が実際にアニメを見るときは楽しみが半減しちゃうのね……」

「いや、事実に対して感情が追い付いてきて、知ってたけどこういうことだと……と情緒が死ぬ」

「死！」

マギーは来る彼の情緒へしばし黙祷を捧げ、

「それで、もう一つの方は？」

「うむ。これは言葉通りの意味だ。正直、良いこととは言えんのだが。……マギー君」

ロンメルは彼女の名を呼び、そして空を見上げ、

「——初視聴の友人のアニメ実況って、それだけで面白くないかね？」

「分かるわあ……」

「さらにその人物の推しが終盤死んだり闇落ちしたりとんでもないことになったらつい

つい意味深しちやわないかな……」

「しちやうわあ……」

『オタクついつい匂わせぶりな発言でネタバレしてしまう問題』！』

「豪が深いわね私たちは！」

「特に彼の推しがラフタとは……」

「彼の情緒にダインスレイブね……」

マギーは再び彼の情緒へ黙祷を捧げた。



ソウルバーニングとSSクアンタが激突を繰り返す。

二種のビットの量子ビームを潜り抜けながら、グレンが飛び込み、シアスタルが迎撃を行う。或いはビットの攻撃からグレンが逃れつつ、シアスタルの攻撃を耐えて反撃を行う。

状況が膠着し、ある程度の拮抗状態が生じていた。

ガンプラの技量や操縦スキル、思考らによるいくつかの要素がかみ合いこの現状を生み出していた。

だが、

「もつと……もつと燃えられる……！」

足りない、心が叫んでいる。

前と違って、まともな戦いにはなっている。二か月でここまでこれたのなら大したものだろう。

だがそれでは満足しきれない。

ただ戦えることを目指して、ここまで来たわけではないのだから。

「——そうだろう」

叫びと共に赤い粒子を纏った拳を叩きこむ。

それはプリマのGNソード改に受け止められ、返す刃で返されたGNソードⅣの一刀を逆の手の甲で弾いて逸らす。そのままの勢いを殺さずに、

「シアスタル！」

頭突きを打ち込んだ。

『っ……野蠻！』

「はっ、なんとでも！」

頭部がぶつかり、弾かれ合い、そしてプリマの機体が下にズレた。

落下することで距離を取ろうとしたと思った瞬間、

「がっ!？」

胸元に衝撃が突き刺さった。

下がったのは上半身だけでエビ反りを行い、そのままの勢いで右足を背後に振り上げる。そのまま頭上を通して蹴りを叩き込んだのだ。

嘘だと、思った時にはSSクアンタは動きを重ねていた。

——ぐるり。

そんな音が耳に聞こえた気がした。

サソリのように体をそらしたまま、体の各部のスラストーを起動させて胴体中心に一回転。加速と遠心力が十分に乘った二撃目の蹴り足がソウルバーニングへと叩き込まれた。

「つつ——!」

意識外の一撃を諸に浴び、機体が地面に激突する。

埒外の可動域。

ガンプラという体からは想像もつかせないその動きの柔らかさをこの瞬間に理解した。

「関節部か……!」

『あら……ちゃんと勉強してたのね』

ガンプラの重要要素の一つに関節部の強度がある。

そこを疎かにすれば可動域が下がり四肢も外れやすく、壊れやすくなる。またリクが存在により現在のGBNでも圧倒的な人気を誇るトランザムシステムも関節部の作りこみが甘いと発動しなかったり、発動中に自壊することもあるのだ。

ソウルバーニングの場合、関節部が近接格闘戦に特化するために非常に頑強に作られている。

だからちよつとの力加減ではまともに動かないし、力を入れすぎれば過剰な動きを生んでしまう。それはGBNにおいても上から数えたほうが早いヒロトが使いあぐねるほどのピーキーさであり、グレンの持つ天性のセンスがあつたからこそ動かせたものだ。

そして、SSクアンタ・プリマ・アソルータの場合、

「ただだけ緩くしたらあんな動きができるってんだ……!」

各関節がソウルバーニングと逆に緩く詰められている。

その塩梅はグレンにはまるで分からぬ。だがあえてゆとりを持たせてジョイントさせることで可動域と柔軟性を高めているのだ。

一歩間違えれば、簡単に外れてしまうような絶妙なバランス。そしてそれを使いこなす繊細極まる操縦技能。

シアスタルのスキルの粋を集めた成果がそこにはある。

『関節のパーツを鏝で丹念に削れば貴方もできるわ』

「気が狂いそうだぜ！」

だが。

ああ、まったく。

「最高だぜ……！」

ガンプラを作ったから、彼女の技術の高さが分かる。

ガンプラで戦ったから、彼女の操縦の巧さが分かる。

以前の戦いでただ魅入られた。

しかし、こうして自ら学び、体験することによりシアスタルの素晴らしさを思い知る。

「ああ、全く——抱きしめたいな、シアスタルツツ！」

燃える血潮に逆らうことをせずに、そして彼は吠えた。

「オールソウル・ユナイト！」

全身のクリアパーツが赤く輝き、エグゾフレームが起動する。

「バーニング熱血！ ウイニング勝利！ ライトニング雷撃！——イグニッションイグニッションツツ！」

グレンのコックピット内、機体表示ウィンドウの三色に分割されていたトライアングルが一度消え——より鮮やかな紅蓮の三角となって表示される。

エグゾフレームの内、四本が腰部から離脱。残った四本がそれぞれ四肢へとレールに沿って移動し、装甲となつて上腕部と脛の位置にそれぞれが合一。残った四本は空中を浮遊し、ソウルバーニングの背部に十字を刻むように展開。

——全てのナノラミネートコートが剥離し、クリアパーツが輝いた。

機体の各地に増量したクリアパーツ、粒子許容体から赤いプラフスキー粒子があふれ出す。

背の四本はフレームの半ばから曲線で繋がれて大きな日輪がソウルバーニングの背後にて背負われる。

腕部のクリアパーツは勝利の道をこじ開ける星のように黄金に。

脚部のクリアパーツは彼方まで至る雷光のように群青に。

そして背後の日輪と胸、両肩のクリアパーツは燃え盛る心のように紅蓮に。

三つの色が一つとなる。

「ソウルバーニングガンダム——トライファイターフレームッ！」

あふれ出すプラフスキー粒子がフィールドを飲み込んでいく。



ソウルバーニングガンダムはヒロトが作りだしたエース機としての最高傑作だ。

ヒロトの半身であり——彼にGBNを愛することを教えてくれた少女と作り、名付けたコアガンダム。

それはアーマーを切り替えることによりあらゆる状況や環境に適応することができるガンプラだった。

対してソウルバーニングガンダムはコンセプトが違う。

トライファイターズの主人公チーム・トライファイターズを元にして、三つの形態変化を実装。

バランス型のソウルバーニング。

パワー型のウイニングスター。

スピード型のライトニングスター。

そしてそれらの純粹強化と粒子放出を全開にしたトライファイター。



コアガンダムほどの対応力はないが、しかしその分純粋な戦闘力へ特化させている。チーム・トライファイターのエースだったカミキ・セカイがよりその力を発揮しつつ、より活躍できるように。

エースとしての存在を極限にまで突き詰めたのがソウルバーニングガンダムであり、その最強形態とでも言うべきものがトライファイターフレームなのだ。

現在のGBNにおいて近接格闘主体機体、その最高傑作。

掛け値なしの賞賛されてしかるべきガンプラだ。

「——そしてそれを使いこなせる貴方も、か」

フィールドを覆うプラフスキー粒子の中でシアスタルは静かに呟いた。

機体は絶賛できる。

だがそれは並みのファイターでは扱えない。

ソウルバーニングの操作性に匹敵する難度のSSクアンタを使うシアスタルだからこそわかるのだ。

そして、ソウルバーニングの輝きはまだ準備が完了していないことが分かる。

あふれ出す粒子がソウルバーニングを中心に球状フィールドとなるそれはあるシステムの前触れ。

バーニングバースト。

トライバーニングの全身、スタービルドストライクガンダムより連なる真骨頂、その先だ。フレームの変化により機体強度を底上げした状態で行う出力強化を行うのだから。

それを扱い熟すだけの自信があるから、切り札を彼は切った。故に認めよう。

そして受けよう。

グレンという男の果し合いを。

正面から叩きつけられる彼の炎を。

きらめく粒子の中で——シアスタルは静かに呟いた。

「クアンタムシステム——起動」

同時、SSクアンタの全身から虹色の粒子が吹き荒れた。

「——！」

驚愕するグレンは息をのみ、ソウルバーニングの粒子とせめぎ合うようにフィールドに広がっていく。

プリマの関節部のGNコンデンサーや胸のGNドライブが展開し、膨大な粒子を放出する。

クアンタムシステム。

それは来るべき対話のためのもの。

紛争の中で生まれ、闘争の中で生きた刹那・F・聖詠。

彼が世界の歪みと向き合う中で見出した答え。

戦うためではなく、分かり合うための光。

別の宇宙に生まれ、全く違う生き物であろうとも。

心臓が無くても、脳が無くても。それでも心さえあれば分かり合えるのだから。

それを——シアスタル・キジマは闘争の為ではなく己の証明のために転用する。

ソウルバーニングの粒子を押し返して生み出される高濃度粒子空間。

虹色と紅蓮に割れる世界の中で、彼女は微笑んだ。

「行くわよ、グレン」

「——ああ」

呼ばれた名に、囁みしめるように頷き返す。

やっと、初めて彼女が自分を見てくれた気がしたから。

燻っていた奥底へと風が吹き込み、そしてさらに燃え盛る。

「バーニング——」

「S2F——」

「<sup>トライ</sup>T3・バーストツツ！」

バーニングトライバースト。

ソウルバーニングの機体装甲が剥離し、さらにクリアパーツが露出。溢れ出した粒子を機体内部フレームに浸透させることで性能を極限まで強化。本来トライバーニングでは各部から炎によってあふれ出していた炎状の粒子は背後の日輪となった四本の粒子許容エグゾフレームが無駄無く循環させることによりバーストの制限時間と強化効率を大幅に伸ばしていた。

それがソウルバーニングガンダム・トライファイターフレームの決戦兵装。

S2F・<sup>トライ</sup>T3バースト。

S2Fとは 刹那<sup>S</sup>・From<sup>2</sup>・聖詠<sup>F</sup>。

T3とはTRANS-AM<sup>T</sup>・Transit・Traillblazer<sup>3</sup>。

展開していた装甲が放出していた粒子を残らず取り込みながら格納され、機体の色が変質する。それまで白だった装甲が濃いエメラルドグリーンに。クリアパーツは虹色となり、溢れ出す粒子を機体が纏いドレスのように。

そして装甲が通常形態に戻った瞬間、SSクアンタの内部フレームまでもが虹色に輝いた。

クアンタムバーストにより周囲に放出した膨大な高濃度粒子を———R G シス  
テムにて取り込み機体を極限強化する。

それがSSクアンタ・プリマ・アソルータの決戦兵装。

爆熱の炎と虹色の風。

互いにその全力を構え、

「さあ———もつと！ 燃えていくぜシアスタルツツ！」

「吹き消してあげるわ———グレンツツ！」